

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

特集：道と地域振興



02・6

特集 道と地域振興

地域の個性にあった道路政策を

わが国最大の自転車ロードレース

マンガ文化活かし一市二町が地域づくり

群馬交響楽団、原点は移動音楽教室

塩の道、地域の経済・文化交流に貢献

住民と協働で熊野古道による活性化を

湯浅御坊道路、地域の救急活動を支援

国道53号の魅力グレードアップで委員会

観光戦略のキーワードは「四国遍路」

生月大橋の開通で本土と陸続きに

〈グラビア〉道と地域振興

レギュラー・リポート

「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

●「あ、雪の匂い」

石田東生 筑波大学教授・社会学類長

北海道・阿部芳昭

宮城県中田町・渡邊武光

群馬県高崎市・新井淨

長野県大田市・横山隆男

三重県東紀州地域・岩田昭人

和歌山県湯浅町・栖原文博

岡山県津山市・光井正起

香川県さぬき市・木村照一

長崎県生月町・坂本浩一

菅原功一（北海道旭川市長）

満田誉（佐賀県企画部長）

篠田昭（新潟日報社論説委員）

総務省自治行政局自治政策課

北海道追分町

愛知県常滑市

京都市・室吉肇

3

22

27

32

35

38

40

42

44

46

48

23

●表紙川岩手県水沢市
子供騎馬武者行列

平安時代後期の戦乱の世に終止符を打った鎮守府將軍源頼義、義家親子の武勇にあやかり、子供の健やかな成長を願う水沢市中上野町、駒形神社（山下知彦宮司）の「子供騎馬武者行列」が五月三日、同市内で行われた。

昭和十一年から始まった駒形神社春祭りのメインイベント。

よるい、かぶと姿の子供十一人が、源



義経、豊臣秀吉、徳川家康といった戦国武将に扮し馬上に。中には上杉謙信の名札をつけた女武者も。一行は稚児や馬に乗った大人など約七十人を従え、將軍気分で、こいのぼりが舞う城下町を練り歩いた。

子供騎馬武者は年々少なくなっている。「少子化のせいか参加者を募るのが大変。それに数多くの馬を集めなければならぬ。県内だけでなく青森県からも出馬してもらっている」（山下宮司）。

●文：やなぎ ●カメラ：小形文男

熊野もうで

三重県東紀州地域活性化推進協議会
三山もうでの熊野古道。豊かな自然が残っている



塩の道

長野県大町市 戦国時代、敵に塩を送ったことで知られる。今は、沿道の各地でまつりが行われている



道

みちは川と並んで、古くから文明の発達と深いかわりを持ってきた。

はるか昔、山野を走る獣によってつくられた「けもの道」、それはやがて人間が切り開いて「道路」になった。わが国でも、おまいりに行くため信仰の道とあがめられたり、文化振興に寄与した道が多い。

今はスポーツの舞台や道路整備で地域の活性化につながったケースも数知れずである。今回は道が広域でのまちづくりに果たした事例を紹介したい。

と地域振興



湯浅・御坊道路＝和歌山県湯浅町
地域の救急活動を支援する道路整備



国道53号グレードアップ委員会＝岡山県津山市
沿線自治体が国道を活用して個性的なまちづくり



四国遍路＝香川県さぬき市
おへんろさんが交流サロンでひと休み



生月大橋＝長崎県生月町
大橋の完成で本土と直結。観光客が大幅増



ツール・ド・北海道大会＝北海道
雄大な自然の中で、わが国最大の自転車ロードレースが行われる



みちのくマンガロード＝宮城県中田町
宮城、秋田県の1市2町が協議会を設置。石ノ森章太郎氏の記念館



移動音楽教室＝群馬県高崎市
群馬交響楽団による群馬の森でのコンサート



菅原功一

北海道旭川市長

「あ、雪の匂い」

「あ、雪の匂い」と聞いて皆さんはどのような印象を受けますか？

このたび、本市のキャッチフレーズを全国から公募し、市民投票を行った結果、「あ、雪の匂い」が決まりました。これからは、同じく公募により制定したロゴデザインとともに、市の印刷物やイベントでの活用はもちろん、企業や市民の皆さんにも利用いただきながら、郷土への愛着を深めつつ、全国に向けてPRしていきたいと考えています。

わがまち旭川は、年間約百四十日も雪が降る全国で有数の積雪寒冷地であり、長期間まちが雪に覆われます。これまで、雪は交通障害を招くなど住民生活に支障を与える「厄介者」とされてきました。そして、除雪などの雪対策は重要な行政課題の一つとして毎年多くの行政費を費やしてきました。

しかし、近年、この「厄介者」が、多くの可能性を秘めた「資源」として見直されています。雪景色や雪像が観光資源となり、それを求めて台湾など外国人観光客が国際チャーター便で旭川空港に来るようになりましたし、降り積もった雪を夏まで保存して冷房に活用するなど、新たなエネルギーとしての活用も広がっています。

そもそも、今回のキャッチフレーズ制定のねらいは、本市が政策的な課題として平成十二年度から取り組んでいるイメージアップ戦略の一環で、本市の持つ可能性や魅力を再発見できるきっかけづくりとして行ったものであります。本市においても、長引く景気低迷による地域経済の悪化、少子高齢化への対応や環境の保全・改善などに加え、

多様化・複雑化する行政需要と財政難など、克服しなければならない多くの課題を抱え厳しい状況に置かれています。そのような厳しい中であって、市民がまちに愛着と誇りを持ち、行政とともに協力しながらともに歩んでいくことが一層求められており、キャッチフレーズ制定はそのよいきっかけになったものと感じております。

私は、これまでも「市政は市民が創る」という理念に基づき、多くの市民との対話を重ね、ともに知恵を出し合い、互いの信頼関係を深めながらまちづくりにあたってきました。こうしたこれまでの取り組みを踏まえ、まちづくりへの市民参加を制度的に保障するための条例の制定を進めております。厳しい時代であるからこそ、これまで以上に、市民参加を積極的にすすめて、市民と行政の「協働」によるまちづくりを実践してまいりたいと考えております。

最後になりましたが、このキャッチフレーズを通して、改めて「雪の匂い」について考えさせられました。

雪には本来、匂いはありません。しかし、雪国で暮らすわれわれは、子供のころから知らず知らずのうちに肌身で「雪の匂い」というものを感じてきたのではないかと考えております。高度情報化時代にあっても、インターネットなどで瞬時に全世界へ旭川の雪景色を伝えることができません。ぜひ、当地にお越しいただき、「雪の匂い」を感じていただきたいと思います。

地域の個性にあった

道路政策を



筑波大学教授・
社会工学部長
石田東生

求められる多種多様な 振興シナリオ

車中心から生活者重視へ

道路整備・交通整備が地域開発や振興にとって重要であることは、専門家の間ではいまさら強調する必要がないほど常識化しているが、普通の人にとってはどうか。これまで地域振興を図るうえで道路整備の必要性は、その地域をほかの地域、とくに大都市域との連結性を高める点から考えられることが多かった。これらは、大消費地である都市域へ早く安価に特産物を輸送する、あるいは他地域や大都市域からたくさんのお客に早くかつ便利にきてもらうための道路整備であり、少し大げさという道路が有する多くの機能の中で「早く行ける」という機能、すなわちアクセシビリティという交通機能の一部に重点を置いた道路

整備である。

しかし、道路の機能は自動車を早く円滑に行わせることだけでなく、ほかにも多数挙げられる。とくに都市内の道路では、通行する、沿道の住宅や商店に出入りする、あるいは立ち止まってあいさつや井戸端会議をするといったことも含んだ形で人や自転車の交通機能、上下水道や電線などを収納する空間機能、通風や日照、さらには緑などの環境機能、まち並みや市街地を構成する主要要素となることも重要な機能である。

今まさに道路や交通政策のあり方についての議論が、社会資本整備審議会道路分科会で行われている。その中で地域振興に関連するものを挙げると、道路政策は「量的拡大」の重視から、「地域ブロックを主体とした個性ある地域づく

り」の支援のために、とくに市街地においては「車中心」の施策から「歩行者・自転車など生活者重視」へ転換することの必要性が議論されている。自動車による移動の効率性や利便性だけでなく、地域の個性にあった多様な道路政策への転換である。しかしこのことは「言うは易く、行うは難し」でもある。

過剰な道路投資や無駄な公共事業という言葉により表現される公共事業批判が強い。このため、事業の効果を分かりやすく示す説明責任が言われている。道路の整備効果として所要時間の短縮は定量的かつ客観的な指標であるためよく使われるが、これ以外の重要な項目、たとえば道路整備が地域の発展・振興に及ぼす効果、生活の質の向上に貢献する効果、地域の多様な個性を育てる効果などについては、定量的に計測することが極めて困難である。

これらの成果は当該地域の人びとには生活実感として、あるいは地域の息吹や活気として感じ取れるかもしれないが、地域以外の人には明確には見えず、したがって必要性や効果についても一般論としては何となく理解できるものの、実感としては感じ取れない状況ではないだろうかと思える。そして、これがとくに地方部の無駄な公共投資という批判につながるものと想像される。

前置きが長くなったが、以上の認識を前提に「みちと地域振興」のあり方について私見を述

べてみたい。

地域のオペレーティングシステム

道 路交通のみならず交通システムが地域振興に果たす役割を考えるための比喩としてパソコンを考えてみよう。



尾道と今治を10の橋で結ぶ瀬戸内海大橋(瀬戸内しまなみ海道)。大三島橋(上)、多々羅大橋(下)

などのいわゆるハードウェアがある。ハードだけでは機能しないのでソフトウェアが必要である。このソフトにも二種類ある。ワープロやメールなどのアプリケーションソフト(AS)とハードをうまく連動させASをきちんと走らせるためのオペレーティングシステム(OS)である。

はほとんどない。パソコンを使うための縁の下
の力持ち的存在で、トラブルがある場合に気になる程度である。

地域振興をパソコンに例えると、ハードはその地域の位置や特性、地域資源であろう。ASは地域振興のテーマと考えられる。ここで強調したいのは、地域振興のシナリオの多種多様性である。地域の個性と特性を活用するためには、



パソコンではいろいろなことができる。この原稿もパソコンのワープロソフトで書いているし、出来上がるとメールで送信する。パソコンの構成を考えると、まずキーボード、ディスプレイ、中央演算装置(CPU)、ディスク

OSとしてはウィンドウズ、UNIXなどがある有名であろうか、あるいはプログラムを自分で作成する人にとってはプログラミング言語もOSに近いものかもしれない。普通にパソコンを使っている場合にはOSの存在を気にすること

他地域のまねはあってはならないし、二匹目のドジョウをねらった地域振興シナリオのほとんどが失敗に終わっているといっても差し支えないだろう。そして、地域の知恵と汗と工夫によって作成されたテーマとシナリオを、地域の中に実現するための基盤条件として交通などの社会資本がある。交通はOSである。

したがって、言うまでもないことであるが、

大事なものは地域振興のシナリオであって、道路整備ではない。極めて当然のことであるが、ときとして逆転することがあることも事実である。本特集に取り上げられた九つの例はシナリオのユニークさといい、貢献度といい特筆すべきものである。あえて、追加する必要はないかもしれないが、道路整備をうまく地域振興に展開した(あるいは試みている)例を紹介しよう。

一つは広域の地域振興であり、本四架橋と高速道路網を活用した観光開発である。県を超えた協働により、太平洋・瀬戸内海・日本海を結び地域資源が自然探求、文化娯楽、浪漫探求、温泉遊食という四つのテーマ別に設定され、ダイナミックな周遊ルートが多数提案されている。時間があれば(時間がなくても)、行ってみたくなるような魅力的な中四国三海紀行である。

二番目に茨城県古河市における例を紹介したい。古河市は歴史と文学を誇るまちである。歴史では室町幕府の古河公方館、蘭学者として著名な鷹見泉石記念館、古河歴史博物館などがあり、文学では永井路子はじめ多くの古河出身の作家を展示した古河文学館、篆刻美術館や古河街角美術館などが市街地に点在する。それを連絡するために、周囲との一体感やよい雰囲気を出すように街路の整備がなされている。楽しく美術館を歩いて回れるみちである。あくまで地域のテーマがメインであり、それに調和する、あるいはテーマを強調するようにみちが整備されている。

整備効果の評価

道 路整備の評価、とくに地方部での地域振興を目的とした道路整備の評価はうまくいっていないことが多い。強い批判が多いことから分かるだろう。所用時間短縮、アクセシビリティ向上、沿道環境改善、交通事故減少などの一般的な評価項目だけでは、地域に特有なシナリオの評価ができないのである。シナリオが異なれば評価の物差しも異なることになる。この場合の評価は、やはりシナリオを考え、地域の知恵が活用される必要がある。

このときに大事なことは、地域の人たちだけでなく地域外の人にも共感してもらえるような評価の必要性であり、信頼性の確保である。分



古河市鷹匠通の街路整備、施工前(上)施工後

かりやすさや信頼性の獲得のために定量的な評価指標が選定されることが多い。適切な目標が数値で設定されていれば、目標がクリアされているかどうかは明快に判断できるからである。政策評価法では原則として定量的な評価が要請されているし、公共事業の評価の代表選手である費用便益分析も言うまでもなく定量的である。しかし、地域振興という総合的な幅広い試みについては、数値指標による評価を主に考えるとしても、それだけですべての効果を表現することは難しい。

たとえば、地域の活気を経済活動のレベルの変化として計測することもできるが、それはあくまで一部分にすぎない。また古河市のようなよい雰囲気づくりのための街路整備の評価は至難の業であろう。かといって評価をしなくてよいことにはならない。地域の財源だけでなく、補助金として地域外からの資源投入がなされる場合には、支持を得るためにも評価と結果の説明が必要であり、必ずしもこれがうまくいっていない現状にあることは前述したとおりである。

定量的評価が難しいとなればどうすればよいのか。残念ながら、筆者は明確な処方箋を持ち合わせていない。地域振興のシナリオが分かりやすい明確なものであるかどうか、みちや交通の整備がシナリオの実現に具体的にどのように貢献するのか、その目標が明確であるかどうか、そしてそれが共有されているかどうかが前提と

なる。多くの関係者によって、シナリオや目標、そして評価方法と結果の説明方法が何度もの度でも議論されることが必要であり、その中でよい方法や説得力のある議論が生み出される可能性に賭けるのである。シナリオが明確であり、道路の活用がうまくなされている、あるいはシナリオにマッチするような道路整備がなされている例を多数、収集整理し、共有することがこのような議論を助けるうえで重要である。

多くの意味を持つ「みち」

「みち」

は言うまでもなくわが国固有のやまと言葉であって、意味は多様である。たとえば、角川漢和辞典では訓読みが「みち」という漢字が二十掲載されている。全部を紹介することはできないが、興味深いものを例示すると、

道Ⅱ人が踏んでいくみち、往来するところ

路Ⅱ人や車馬の往来するところ、大きなみち

径Ⅱこみち

軌Ⅱわだちのみち

衢Ⅱ分かれみち、ちまた

倫Ⅱ人と人との関係、すじみち

理Ⅱものごとのすじみち

などが目に付く。実に多様であり、多くの機能を表現していることが分かっていただけたと思う。

人のための「みち」の重要性が強調されるこ

とが最近多いが、「道」は人のためのものである。馬車や自動車のための「路」だけではないこと、風景や雰囲気を楽しみながら散策する径も「みち」であること、公共交通の通路である軌道も「みち」であること、さらには「みち」が集まる場所である「衢」、すなわちまちも「みち」であることを先人たちは意識していた。

戦後の道路整備は、モータリゼーションのもたらした渋滞・混雑を緩和するため、あるいは交通事故削減のために、交通機能を重視した「路」の整備が大宗であったといえるのではない。先人たちの懸命の努力によって、ある程度の道路整備が達成された現在、「みち」という言葉の広がりに対応して、道路本来の機能の多様性と使われ方が、とくに地域振興に関して、シナリオにふさわしい多様な「みち」の追求がなされなければならない。

そして、このことが納税者や市民から支持されるためには、シナリオの共有とそのシナリオへの「みち」の整備の貢献を丁寧にきちんと説明することが要請される。「倫Ⅱ人と人との関係、すじみち」、「理Ⅱものごとのすじみち」という「みち」の意味はこのことをあらかじめ示唆していて、興味深い。

言葉に負けないようにわれわれ一人ひとりが努力すること、そしてそれらが結集されて初めて、「みち」が地域振興に貢献できることを主張して終わりたい。

わが国最大の自転車ロードレース 秋風受けツール・ド・北海道国際大会



財ツール・ド・北海道協会専務理事
阿部芳昭

さわやかな秋風を受け毎年九月に、わが国最大の自転車ロードレースであるツール・ド・北海道国際大会が開催される。昨年は、九月十二日から七日間にわたり函館、室蘭、札幌などを巡るステージレースが開催され、今年は九月十

海道大会は、北海道の豊かな自然環境を活かし、サイクルスポーツを核とした活動を展開することによって、北海道における観光資源および産業の開発、文化の振興、生活の向上、健康・体力の増進とサイクルスポーツなどの普及・振興に貢献することを目的にしている。大会の運営は、国、北海道、市町村、民間の各種団体で組織するツール・ド・北海道国際大会実行委員会が行っている。

当時、ヨーロッパで盛んなツール・ド・フランスのような、町から町へのステージレースを日本でも開催したいとの各方面からの要望もあり、自然環境の優れた北海道で開催することとなった。しかし、わが国においてはそれまで本格的なステージレースがなく、ま



登別温泉街を通過する集団

た公道上で実施する前例のない大会のため、道路使用上の問題、基金など必要な経費確保といった多くの問題に直面しながら、関係機関や企業の協力で第一回のツール・ド・北海道大会を開いた。

一日から北海道東部を中心にレースが展開される予定である。

文化の振興にも貢献

昭和六十二年に始まったこのツール・ド・北

まさに運営は、海外などのレースを参考にしつつ一つひとつ手探りで進める手づくりの大会から始まった。

選手五人からなる一チームが一体となって各ステージを走り、チーム対チーム、チーム対個人の巧妙な駆け引きが見所。上位三人の成績でタイムを競う。第一回大会では最終ステージの強風で、完走した選手は九十五人中わずか二十人と、団体総合時間賞の対象が二チームのみという「ハプニング」も。

国際大会

国内の学生チームを中心にしてスタートした大会は札幌を中心とした道央、帯広・釧路・北見などの道東、稚内・旭川などの道北、函館からスタートする道南地方と北海道各地で開催し回を重ねてきたが、第五回大会を記念して海外のチームを招請し、徐々に大会のレベルアップを図ってきた。

このように発展してきた競技大会も平成九年の第十一回大会からは国際自転車競技連合（UCI）公認のクラス2・6のステージレースとして登録を行い、アンチ・ドーピング検査など

を実施する名実ともに国際大会となり、さらに十二年からは一ランク上の2・5クラスに格上げされ、今日に至っている。

国際大会では、海外の五チームの参加が義務づけられており、昨年の大会にはアイルランド、オランダ、カナダ、ドイツ、韓国のチームが参加したが、過去にはトルコ、ニュージーランド、アメリカのチームも北海道の大地を疾走した。

パンクは日常茶飯事

自転車競技には、競輪場で行われるトラックレース、一般道路で行われるロードレース、オフロードを走るMTBなどがある。ロードレースはマラソンにたとえられる長距離競技で、ステージレースとなると、平均速度は時速四十キロ以上で、一ステージで二百キロ近くも走り、それが数日間続く極めて過酷なレースだ。

このため、競技者はスタミナとパワーが要求される。走りながら水や栄養補給をするため自ら食料を持って走るとともに、レースの途中には食料などを補給することができるように補給所を設けている。

また、自転車はアルミやカーボン製などで極めて軽くしており、変速ギアもフロント二〜三段、リアは九段から十段もある高性能なものを使用している。このように極限に近い仕様のためかレース途中でのタイヤのパンクなどのアクシデントは日常茶飯事であり、このためのサポートカーが、競技者の後方を伴走する。

さらにコミセール（審判）などもレース状況を監視するため選手団の前後を自動車やオートバイで走っており、ツール・ド・北海道国際大会では合わせて約六十台の車が百台の自転車をエスコートするような形でキャラバンを構成している。



816キロを走破

昨年の大会は外国からの五チームを含む二十四チーム九十九人の選手が参加した。函館市でのプロlogue（幕開け競技）を皮切りに、札幌市での第六ステージまで、道南、道央の三十市町村を通過し、大会史上最長の全長八百十六キロの区間で競技が行われた。今までにない山岳地帯の連続で高低差の大きい難度の高いコースで二十一世紀の幕開けにふさわしい大会だった。

競技開始までは台風十五号、米国での同時多発テロの影響など不安材料が多々あったが、開始後は天候も回復し、有珠山噴火で被害を受けた洞爺湖温泉や、東日本最大のつり橋である白鳥大橋も通過し、大勢の市民の声援を受けながら各選手が道南、道央を走った。

その結果、個人総合時間賞（個人総合優勝）はアイルランドのデヴィッド・マッキン選手が獲得、団体総合ではアイルランドが二年ぶり三度目の優勝を飾り、それぞれ北海道カップ、国土交通大臣賞を手にした。

また、同時に全国から延べ六百二十人の一般市民が参加して市民レースも行われ、北海道の風を受け大いに北の大自然を満喫した。

このように何百キロにもわたり一般の道路を走行する関係上、交通規制のために五百人以上の警察官、関係市町村から千三百人以上の職員、三千人以上のボランティアなど各階各層の協力をいただきながら実施している。

マンガ文化活かし一市二町が地域づくり 連絡協議会設置し、共同事業を展開



中田町生涯学習課長
渡邊武光

現在日本の総出版部数の約四〇%をマンガが占め、今やアニメ、コンピュータ・ゲームなどはマンガ抜きでは考えられない。商品の宣伝、映画やテレビドラマの原作など、大衆に根差したマンガの社会的な影響は大きい。

マンガは国際性、あらゆる事柄を表現できる多様性、人に分かりやすく効果的に伝えるメディア性、ユーモアや楽しさ・ゆとりなど心の豊かさを形成できる娯楽性、世代を超え多くの人がとに愛される共感性、未来へのロマンや夢を与える創造性——などを持っている。こうしたマンガ文化の特性を活かして、地域づくりに取り組んでいるのが東北二県の一市二町、宮城県石巻市、同県中田町、秋田県増田町である。

まんが美術館

増田町は、県の東南部に位置し、奥羽山脈と出羽丘陵に挟まれた横手盆地の南端に位置し、「釣りキチ三平」などの作者で知られる漫画家矢口高雄氏のふるさと。平成七年に全国で初めて「マンガ」をテーマとした本格的な「まんが美術館」を開館した。美術館では、矢口氏のフイールドワークを紹介するとともに、マンガ文

化の歴史や国内外の著名な漫画家の原画を展示したギャラリーを備え、マンガ単行本、週刊の漫画誌や、アニメーションも楽しめる。

四月下旬から五月下旬にかけて特別企画として「赤塚不二夫展」を開催。またゴールデンウィークには矢口氏のサイン会も開かれた。

この美術館を中心に、生涯学習館、図書館、資料館、ヤングプラザという五つの施設を整備した。総合的な機能を持ち子供から大人まで誰でもが親しみをもって利用できる複合型建物だ。

石ノ森記念館

中田町は、県の北東部に位置し、東に北上川が流れる岩手県に接した、町のほとんどが田んぼという、県内でも有数の米どころ。「怪傑ハリマオ」「仮面ライダー」「サイボーグ009」などで知られる漫画家石ノ森章太郎氏のふるさとでもあり、平成十二年には、環境・物・人を感じる空間を基本として、自然との共生や人間石ノ森章太郎を感じさせる「石ノ森章太郎ふるさと記念館」がオープンした。

記念館には、年三回開催する企画展示室や石ノ森氏の愛用した宝物、デビュー作の原画、石

ノ森氏や手塚治虫氏など後に日本の漫画界の中心となって活躍した人が若かりしころ住んでいた東京のアパートキワ荘の再現、単行本やテレビ放映されたビデオなどの図書・ビデオライブラリーコーナー、オリジナルアニメ「小川のメダカ」が常時上映されているビデオシアターなどを備えた常設展示室がある。四月下旬から七月中旬までの日程で、石ノ森氏作の「八百八町表裏化粧師^{けわいし}」のスチール写真展が開かれている。

前庭にはメダカやフナなどの淡水魚が遊泳している池や小川が流れていて自然と調和の取れた施設となっている。また、記念館に隣接して石ノ森氏が上京するまで寝食をした生家も現存し、観覧できるようになっている。

石巻には萬画館

石巻市は、県の北東部、太平洋、牡鹿半島丘陵地などに囲まれ、古くから水産・商業都



石ノ森萬画館

市として栄え、石巻港開港により工業都市として発展した広域圏の中心都市。石ノ森氏が高校時代まで過ごし映画館通いをしたゆかりのまちに十三年七月「石ノ森萬画館」も開館した。

萬画館は、マンガによる地域文化の発信拠点、市民が交流できる「マンガで結ばれるまちづくりステーション」として、さらには中心市街地の活性化の中核施設として整備した。萬画館は、交流、展示、育成、保存、研究、サービスの六部門からなる。主な設備としては、石ノ森氏の原画やキャラクターと機器を活用して押す、踏む、触る、のぞくなど五感をフルに使い、来館者のアクションを起こすことによって楽しめる常設展示室、企画展示室のほか、石巻の歴史紹介コーナー、市民交流コーナーが設けられている。萬画館では水島新司氏の軌跡を振り返っての原画展が六月中旬まで開催される。

マルチメディア工房ではマンガ、アニメの制作が実体験できる。この施設は、石ノ森氏の希望もあり、マンガの情報やソフトを世界に情報発信する宇宙船の形になっている。

この一市二町は、宮城県石巻市と秋田県本荘市を結ぶ国道398号線沿いにあり、「みちのくマンガロード連絡協議会」を平成十三年四月二十七日に結成した。

この協議会は、東北地域においてマンガ文化を活かした地域づくりを積極的に推進する自治体で組織し、お互い密接に連携しながら、マンガというジャンルに共通した「夢」「ロマン」

「創造」「感性」「楽しさ」を通じて、関係市町村の住民と一体となって共同事業を展開し、マンガ文化の振興に寄与する。さらに市町村の特色ある地域文化や資源、歴史、風土を生かした地域情報の発信と地域間交流を積極的に展開し、相互の発展と親睦を図ることを目的にしている。連絡協議会は、次のような共同事業を展開することとしている。

①共通のロゴマークを作成し、これを活用して共同PRや印刷物の共同化を行う。各館それぞれ異なった施設を満喫し、さらに違った企画展

を来館者に一連（ルート化）の中で楽しんでもらうように努める。

②共同企画などを制作して、エージェントなどと協働できるように努める。

③一市二町の各施設の情報などをインターネットやホームページでリンクし、共同情報として情報発信できるようにする。

④一市二町の共通理解を得るために、少年層、青年層、成人層および熟年層、壮年層など、住民相互の交流を図ることによって地域間交流と地域活性化につなげる。

⑤それぞれの特産品を一市二町のイベント開催時に出版協力することとする。

⑥首都圏での共同PRや共同物産展を開催する。協議会に加入しているのは現在三団体だけだが、岩手、秋田、山形県内の一部市が加入を検討しているという。

マンガサミット

今後マンガやアニメなどは、情報化やIT産業の技術革新と相乗してますます需用の拡大が期待できる分野でもあり、次世代を担う青少年の感受性や創造性をはぐくむ教育文化としても位置付けられると考えられる。

この十月には横浜でアジアMANGAサミットが開催されることも決まった。

また、全国各地にある漫画を活用した地域づくりの施設とも協働して取り組むことができるよう努力したい。

みちのくマンガロード連絡協議会設立総会



群馬交響楽団、原点は移動音楽教室 道路網の整備が文化をはぐくむ



財群馬交響楽団事務局副局長
新井 浄

前身は高崎市民オーケストラ

昭和二十年十一月、敗戦による廃虚と虚脱が日本全土を覆っていた。高崎市役所の会議室に、何人かの音楽好きな方々が集まり「日本はどうなるだろう」「これからの日本は一人ひとりの質を高めて、世界のどこへいっても一個の人間として歓迎され、尊敬されるようにならなければならぬ」。当時、高崎の文化運動の中心であった井上房一郎氏の言葉が、新しい文化国家、平和国家への建設につながった。「オーケストラをつくるうではないか!」、こうして群馬交響楽団の前身である「高崎市民オーケストラ」が誕生した。



人口十万人以下の小都市では交響楽団の存続が難しい。オーケストラを組織しても演奏する場所がなかった

時代に、小中学生を中心として、できるかぎり多くの県民に本当の音楽を聞かせたかった群響。靴をすりへらして学校から学校を歩いても本来の仕事はほとんどない。群響創立五十七年の歴史に残る第一回の移動音楽教室は、昭和二十二年五月二十九日、安中市で始まった。翌二十三年に「群馬フィルハーモニーオーケストラ」に改称、二十四年、財団法人として認可された。現在の群馬交響楽団となったのは三十八年である。

移動音楽教室は、不安定ながらも細々と続いた。まだ交通事情の悪いときで、汽車は満員のことが多く、移動は一苦勞であった。バスは楽員と楽器が乗るだけでいっぱいになってしまう。大きな楽器は乗車を断られ、遠い道のりをかっいで歩き泊まり込みということもあった。演奏の合間に曲目や楽器の解説を入れるというスタイルで、ときには、ベートーベンとモーツァルトの生まれた年を逆にしたり、ビゼー作曲のカルメンを「カルメン作曲アルルの女より、ファランドールを演奏します」とやったりしたが、群響の育ての親、初代事務局長丸山勝廣氏の、子供を静かにさせることと、感動を呼ぶ名調子

は、だれにもまねができなかったそうである。

毎年20万人以上の生徒が鑑賞

地方都市のプロ交響楽団として生きていくために考えられた「移動音楽教室」。群馬交響楽団の「県民のオーケストラ」としての第一歩であると同時に多難な道のりでもあった。当時、移動音楽教室を聞いた生徒は毎年三百校、二十万人以上に及んだ。群馬県民であれば、全員が小学生のときに二度、中、高校生ときに一度ずつ、計四回の演奏会を現在でも経験しているのである。ある楽団員は、「群響で演奏する喜びの一つは、音楽を通して子供から大人まで多くの人びとと交流できることである」と誇らしげに話す。ある音楽教室の朝のこと。公演においては、楽団員は基本的には現地集合・現地解散。マイカー使用者も多いが、県内の移動には楽団のハイブリットバスを使う。集合場所は音楽センター前。出発時刻の十分ほど前に、バスがやってくる。ほどなく楽器を手にした楽団員が三々五々集まり、バスに乗り込む。バスのウィンドー越しに、チェロが二人分の座席を占有して座っているのが見える。楽団員にとっては、楽器

は命と同じくらい大切なもの。昭和三十年代から県内の道路は著しく改良され整備されてきている。また頻繁な移動には、東西、南北に走る高速道路が役かっている。「楽団員は車好き、地方の公演でも車で出掛ける人も多い。県内の公演後に温泉まで一走りして汗を流したり、楽しみも広がる」とある楽員。道は、オーケストラの快適な移動を陰で支え、音楽を愛する人びとに心地よいシンフォニーを届けている。

「ここに泉あり」のモデルに

群馬交響楽団
をモデルにして

昭和三十年に封
切られた映画

「ここに泉あり」

(監督…今井正、

主演…岸恵子、

岡田英次、小林

桂樹)は、全国

で三百万人が見

たという。「地方

でオーケストラが成功すれば奇跡」といわれる

中で、群響は市民の優れた構想と好運な出会い

との重なり合いによって存続してきたと言っても

過言ではない。その活動を支えた多くの人のびと

を動かしたものは、オーケストラが優れた財で

あり、素晴らしい芸術文化に触れることで人の

心の中にわきあがる勇氣、豊かさであった。



映画「ここに泉あり」のロケ風景

昨年、NHKの歌謡チャリティーコンサートでそうそうたる歌手の方々が出演され、群馬交響楽団と共演した。岡本真夜作詞、作曲のトゥモローを全員で合唱した。

「涙の数だけ強くなれるよ アスファルトに咲く花のように、みるものすべてにおびえないで、明日は来るよ 君のために、涙の数だけ強くなれるよ アスファルトに咲く花のように、みるものすべてにおびえないで、明日は来るよ 君のために」

群馬交響楽団は、このアスファルトに咲く花のように群馬県の道を苦難を越えて走り続けてきたともいえる。

アスファルトに咲く花

「花は鉄路の盛土のうえにも咲く」。昭和十一年に発行された新聞、「土曜日」の巻頭言である。哲学者久野収、中井正一などが戦前、思想弾圧のなかで出版した新聞。この巻頭言の一節をここに紹介したい。

「美しいせせらぎ、可愛い花、小さなめだかが走っている小川の上を覆うて、灰色の鉄道の線路が一直線に横切ったとき、ラスキンは何ての人間の過去の親しいものが斜めに断ち切られてしまったかの様に戦慄したのである。しかし、テニソンはそのとき、芸術は自然の如く、その花をもつて、鉄道の盛土を覆い得ると答えたのである」

イギリスの代表的詩人のアルフレッド・テニ

ソンは、芸術は自然のごとく、その花をもつて、鉄道の盛土を覆い得る、つまりアスファルトに咲く花になることができると考えた。

この鉄路に咲く花、アスファルトに咲く花、つまり詩人テニソンの言葉を借りれば芸術とは、どんな力を持っていたのであろうか。

先の土曜日という新聞の巻頭言だが、「この鉄路の上に咲く花は、千金の力を必要としたのではない。日々の絶え間なき必要を守つたのである。我の生きて此処に今居ることを手離さないこと、その批判を放棄しないことに於いて、初めて、凡ての灰色の路線を、花をもつて埋めることができるのである」

群馬交響楽団は、全国各地で演奏を重ね、合唱団を結成したほか、平成六年にはヨーロッパ公演も行なうなど高い評価を得、文化交流の架け橋になった。日本有数のオーケストラとして意欲的に活動している。



移動音楽教室

塩の道、地域の経済・文化交流に貢献 長野、新潟両県で歩くイベント開催



大町市企画財政課係長
横山隆男

日本海と信州・松本平を結ぶ道の歴史は、遠く古代にさかのぼり、ヒスイが流通した縄文時代以前から交流があったと言われている。中世から近世にかけて、この道は松本城下から新潟県糸魚川まで百二十余^キを結ぶ動脈・千国街道（松本街道、糸魚川街道とも呼ばれている）として、生活に必要な物資を、歩荷や牛方^{はうかた}といった輸送職人が、雪深い冬も険しい山々を越えて運んでいた。

信州側からは大豆、煙草、綿、麻などが、糸魚川からは塩や海産物などの物資が運ばれ、地域間の経済・文化の交流に重要な役割を果たし、通称「塩の道」と呼ばれた。

エピソードの誕生

戦国時代には、千国街道の重要性に着目した上杉謙信（一五三〇～七八）は、天正二年（一五七四）、番所の設置と信州間屋制度を設け、街道の本格的な管理を始めた。しかし、甲信地方を治める武田家と交戦中も、信州との塩や海産物などの自由交易を保障していたため、「敵に塩を送る」というエピソードが生まれるものにもなった。

「塩の道」は、明治二十年前後まで、地域の経済路線として、重要な役割を果たしてきた。

その後、JR大糸線や国道の整備で人びとの記憶から忘れ去られるようになった。しかし、地元住民の生活道として利用されていたため、道は比較的良好な状態が保たれていた。

近年、この「塩の道」の良さが見直されてきている。

塩問屋を活用した博物館

「塩の道」の交流が盛んなころ、大町は海陸の物資の中継所で、牛方などの休む場所だったことから、問屋や商店・宿・茶店などが軒を並べにぎわった。こうした歴史があることから、大町市には、「塩の道博物館」が造られた。博物館は、江戸時代の庄屋で塩問屋を営んだ平林家の建物を利用し、館内には、当時の歩荷や牛方の運搬道具、旅姿や弁当箱、地域住民の生活道具、古文書などを展示している。

また、長野県の沿道小谷村、白馬村、大町市の三市村は、毎年五月の連休に「塩の道祭り」を開催し、今年で二十三回を数えた。このまわりは、昔の旅姿などに扮^かして、史跡、名所を見

塩の道千国街道



ながら、往時の面影を残した古道「塩の道」を歩くイベントで、毎年多くの人がさまざまな衣装で参加する。糸魚川市においても、毎年春と秋に、一泊二日で「越後いといがわ塩の道を歩く旅」を開催している。

小谷村は、平成七年七月、梅雨前線豪雨により、壊滅的な大災害を被った。その被害は全村にわたり、とくに生命線である国道148号、JR大糸線は各所で寸断され、日本海側からの交通手段が完全に遮断された。しかし塩の道は、ほとんど被害がなく、その道を整備した昔の人の知恵に多くの人が感心した。

国の史跡に指定

今年三月、糸魚川市内の「塩の道」が「国史跡松本街道」として指定された。箱根旧街道（神奈川県）

日光杉並木街道（栃木県）など五街道およびそれに準ずる主要街道以外の、いわゆる脇街道が指定されたのは、「塩の道」が全国で初め



て。

内陸の長野県へ塩を運んだルートとしては、糸魚川から延びる「北塩ルート」と、静岡県相良町から北上する「南塩ルート」の二つがあった。この南北ルートをつなぐと三百五十キロにも及び、沿線の市町村は、十二市三十四町村となる。静岡県掛川市長の提唱で平成七年度から、これら自治体が一堂に会して「日本海—太平洋塩の道会議」を毎年開催することになった。その沿線の各市町村が相互に連携し、考古学、宿場旧跡、名勝、城郭、特産物、物流用具、生活技能、芸術など地域の資源を再発掘するとともに産業経済の交流を図り、南北の連携軸のもと広域的な地域振興を目指している。

松糸道路の整備

ところで松本平と糸魚川とを結ぶ地域高規格道路「松本糸魚川連絡道路（以下松糸道路という）」は全長約百キロ（うち長野県側約八十キロ、新潟県側約二十キロ）の道路で、「二十一世紀の塩の道」とも言われている。地域高規格道路とは、全国レベルの高規格幹線道路網と一体となつて高速交通体系を築き、地域相互の交流促進・連携強化を図る規格の高い道路。日本海と松本平を結ぶ新しい道路の整備が望まれ、これまで、たくさんの住民や団体によって、その整備促進活動が展開されてきた。

そうした多くの人たちの努力の甲斐があつて、十一年十二月、建設省（現国土交通省）は、「松糸道路」の長野県・堀金村・大町市間の約十五キロと糸魚川市の約八キロを「調査区間」に指定した。新潟県側では、調査事業が順調に進んでいるが、長野県側は、さまざまな事情から二年以上にわたり、事業が停滞している。

長野県十七市のうち、高速道路や新幹線などの高速交通網から外れているのは、大町市だけ。そして長野県十広域において、高速交通体系の枠組みから外れているのは、木曾地域と大北地域（大町市と北安曇郡）だが、木曾地域では木曾右岸堤防道路の整備が進められており、唯一取り残されているのは、大北地域だけである。

大北地域のこれからの発展と振興を考えた場合、「松糸道路」の整備は、必要不可欠である。また、二十一世紀は「環日本海時代」とも言われており、環日本海の交流を大北地域の発展と飛躍に活用するうえで、「松糸道路」は大変重要な道路になることが期待される。

「松糸道路」の整備には、長い年月がかかる。したがって、この道路は今を生きる私たちのためめというよりは、私たちの子供や孫たちのために必要な道路であるのかもしれない。私たちは、今、国土の均衡ある発展と新しい時代にふさわしい地域振興を図るために、「二十一世紀の塩の道」・地域高規格道路「松本糸魚川連絡道路」の一刻も早い道路の完成に取り組んでいくことが極めて重要になっている。

住民と協働で熊野古道による活性化を 人材育成大学、語り部が大きな原動力

東紀州。紀伊半島にある三重県南部の紀伊長島町、海山町、尾鷲市、熊野市、御浜町、紀宝町、紀和町、鵜殿村の八市町村の総称で人口は全市町村合わせても十万人弱である。基幹産業の低迷などによる地域経済の停滞と過疎、高齢化が進んでいる。

推進協議会の設立

平成五年度、三重県は同地域の活性化を図る

ため、学識経験者・地元有識者・地元市町村長らで構成する「東紀州地域活性化調査委員会」を設置し、「東紀州ふるさと・ふれあい交流圏の形成」をトータルコンセプトに設定。その施策として「自然・文化・風土を活かした都市住民との交流の促進」「人材の育成」などが提案された。注目すべき点は調査検討に終わらず、推進体制の整備がなされたことである。六年五月、地域内の八市町村と県が一体となって東紀州地域活性化事業推進協議会（以下協議会）を設立した。

協議会の目的は、「地域の自然、文化、産業などを活用した施策などを県と連携しながら協働で推進し、地域活性化を図る」ことだが、とりわけ「熊野古道伊勢路」の整備・活用の推進、

「東紀州活性化大学」に代表される人材育成を二つの大きな柱に掲げた。

六年度にスタートした社会人への講座、東紀州活性化大学は、現在八期生を迎え、受講生の総数は二百十三人を数える。毎年約三十人の受講生が一年の前半を外部講師や地域講師の講義で学び、後半は二つのゼミで自分たちの興味に合ったテーマで調査研究、その成果を提案するというカリキュラムである。

また、受講生は、修了後も各期でOBチームを結成し、自主研修や親睦活動が続いている。彼らが中心となって多くの地域づくり団体が生まれ、新たにイベントが創設されたり、地域の活力の起爆剤となっている。

「地域の特性を活かし、個性豊かな地域づくりと産業振興を推進し、地域活性化の担い手となる意欲ある人材を養成する」という人材育成の当初の目的は、ある程度成果を生み評価を得ている。なお、今年度は、「大学院」を設置し、さらなるバージョンアップを計画中である。

街道整備は原形復旧で

熊野に参るには



東紀州地域活性化事業
推進協議会事務局長
岩田昭人

紀路と伊勢路のどれ近し どれ遠し
広大慈悲の道なれば

紀路も伊勢路も遠からず

さて熊野古道だが、後白河法皇が編集したと伝わる「梁塵秘抄」にうたわれているように、平安末期、すでに東西の熊野街道が熊野詣でのルートとして庶民の間に知られていた。熊野三山（本宮、新宮、那智）にお参りするのために紀伊半島を西回りする「紀伊路」と、東回りする「伊勢路」である。

前者は皇族・貴族たちの参詣

ルートであったのに対し、「伊勢路」は巡礼に代表される庶民の道であった。いわゆる「癒しの道」である。従来、熊野古道といえは和歌山の「紀伊路」がクローズアップされ、「伊勢路」は忘れられがちであった。

協議会は、石畳の荘厳さ、熊野灘の素晴らしさなど魅力あふれる「伊勢路」をこの地域固有



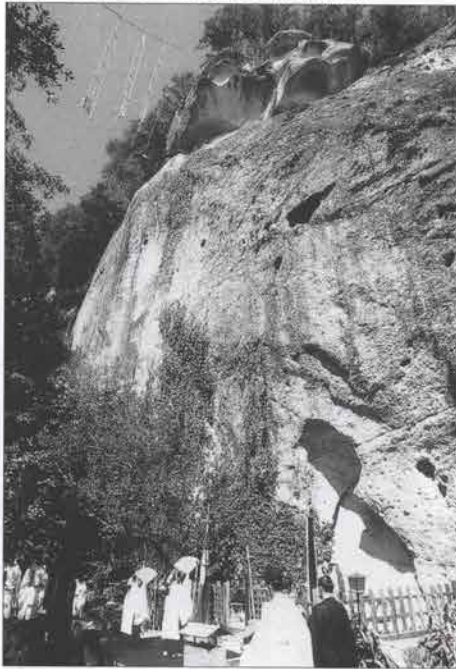
熊野古道主要ルート

かつ共通の歴史的・文化的資源として着目し、古道を軸に市町村間の結束と連携を図りながら、地域住民とも一体となった「古道による活性化」に取り組むことを決めた。

官民協働の整備計画策定委員会が「原形復旧」を基本原則とした「熊野古道整備計画」を策定した。テーマは「甦る神々のみち」。この計画に沿って、自然歩道などを活用して整備を続けているが、県、市町村だけでなく国土交通省(旧建設省)紀



神木流紋岩が端正に残る横垣峠(御浜町)



浜街道沿いの花の窟での春の大祭(熊野市)

訪れる人びとの利便を図り、東紀州の風土、歴史、文化の素晴らしさを伝えることはもちろんだが、語り部として地域を学び、来訪者との交流を通じて地域の資源・魅力を再認識、再発見をし、地域づくり、もてなしの心の醸成にひらけていこうとするところにもあった。

十一年三月には、このガイド登録者により「熊野古道語り部友の会(現在会員百九十一人)」が結成されたが、彼らを中心に、また彼らに触

協議会の取り組みの一つの集大成であった。それはサブテーマの「うみ やま ころも くまの道」に如実に集約されている。なんとこの年度には十四万人が「伊勢路」を訪れてくれたのである。

さらに、「広範な視点から歴史、民族、文学などの研究を行い、その成果を応用したさまざまな企画を提案する」地域内外の研究者、専門家、アマチュアをネットワーク化した官民協働の地域学シンクタンク「みえ熊野学研究会」を立ち上げることができた。ここでは、毎年成果として熊野の歴史と文化を双書として発行することにし、すでに『熊野道中記』『熊野の民俗と祭り』を上梓し反響を呼んでいる。

世界遺産登録の推進

地域活性化の指標は、「地域内部に多様な集団が形成されているかどうか、そしてそれらが相互に、あるいは外部集団とネットワークされているかどうか」といわれるが、道による地域活性化もあくまでも人材に尽きる。引き続き語り部を中心とした多様なネットワークづくりの必要がある。

ここに来て、熊野古道伊勢路にも世界遺産登録の朗報が持ち上がった。すでに暫定リストにも記載され、登録に向け作業を進めている。強力な追い風が吹いた。でもどんなに多くの来訪者があるうと「癒しの道」としての熊野古道伊勢路を忘れてはなるまい。

ガイド養成講座

勢国道工事事務所など多くの力に支えられた。

一方、ガイドブックの作成、探訪ウォークの実施、モニターツアーによる旅行エージェンต์への働き掛けなど情報発信にも力を注いだ。古道売り出しの一番の推進力となったのは、「熊野古道語り部」の存在である。

九年度から地域住民を対象として開設した「熊野古道ガイド養成講座」の狙いは、古道を

湯浅御坊道路、地域の救急活動を支援 交通渋滞が緩和、沿道環境も改善



湯浅町企画課
栖原文博

しょうゆ発祥の地

湯浅町は和歌山県の北西部、有田郡の西端にあつて、紀伊水道に面した人口約一万五千人のまちで、しょうゆ発祥の地である。

古いしょうゆ蔵がまち並みの特長になっている。昔ながらの製法で、素材にこだわりながら醸造されたしょうゆは逸品だ。

町の西部

は西有田県立自然公園の中心を占めるリアス式海岸に恵まれ、夏ともなれば海水浴やキャ



湯浅の伝統的なまち並み

ンブ地としてにぎわう。東部の大部分は、三本松峰を主峰とした山脈で、ここにある温泉施設「二の丸温泉」やミネラルウォーター汲み場には、年間約二十万人もの人が訪れる。国民宿舎「湯浅城」周辺には、野球場、テニスコートなどがあり、学生、社会人などの合宿地としても好評をいただいている。

近年では、湯浅の美しい海や山、温泉といった恵まれた自然景観と全国的にも貴重な歴史的建造物や伝統的なまち並みの保全と環境整備に、また、中心市街地のさらなる活性化を推進して、多くの方々に訪れていただけるよう、交流人口の増加などを目指したまちづくりに取り組んでいる。

近くなった和歌山市

本町を横断する国道42号線は、古くから周辺地域を結ぶ主要道路となつてきているが、休日、夏期ともなると、交通渋滞がひどく、観光客はもとより、住民からも多くの不満の声が寄せられていた。しかし昭和五十九年、北部の海南市と本町を結ぶ「海南湯浅道路」が、平成五年には南部の御坊市と本町を結ぶ「湯浅御坊道路」の

開通で交通渋滞が緩和された。さらにまた沿道の騒音、振動が少なくなるなど環境面でも改善された。

両自動車道開通以前は和歌山市まで約一時間、大阪市まで約二時間もかかったため、町民の間では、和歌山市、大阪市などは「遠い」「時間がかかる」という意識が強かった。自動車道開通後は、「近い」「気軽に行ける」というように変化してきた。町を訪れる人にとっても同様で、自動車道を利用した場合の時間短縮の影響は多方面において相当な効果をもたらしていると考えられる。

とくに地元住民からは、救急医療活動への影響についての声をよく聞く。

不安が安心へ

本町は以前から福祉施策への取り組みに力を入れてきたが、消防組合設立は県内市町村の中でも遅かったことから、救急体制への住民の不安が大きかった。しかも当時、同組合管内で、受け入れ困難な患者が発生した場合、御坊、和歌山市内の病院に搬送しなければならなかった。しかし、消防組合設立の二年後には「海南湯

浅道路」が開通して救急体制の充実が図られ、深刻な不安が一気に安心へと変わった。

多くの住民から寄せられた意見は、「道路開通以前は、病院到着までの時間が長く、非常にイライラした。またカーブの度に体が左右に大きく揺れ、道も今のように平坦でなく、ガタガタと縦揺れもひどかったので、病院へ着くまでに車酔いをする人もいた。応急処置をしてもらうのも大変で、十分な処置をできない救急隊員も腹立たしいことが多かった」「病院までの時間は一時間かかっていたが、道路開通後は約半分の三十分になった。単に時間が半分になったというだけでなく、乗っていても揺れは少ないし、応急処置もきちんとしてもらえるので、気分的にもこの道路の影響は大きい」というものだ。

さて、本町では救急体制確立のため、昭和五十七年に隣の広川町との一部事務組合の湯浅広川消防組合を設立した。それ以前は、役場に患者輸送車を配備し、今の救急車の役割的なことをしていた。

当時は、「海南湯浅道路」も「湯浅御坊道路」も開通していなかった。このため、峠のある急しゅんな山間部の一般道を走行せざるをえなかった。いま振り返るといろんな問題があった。救急医療センターや専門的治療のできる病院がある和歌山市までは約一時間かかった。救急活動は時間との闘いなので、搬送途中に危篤状態に陥ったり、近くの救急体制の整っていない病院（診療所）に搬送したこともあった。自動車

道に比べ一般道は、段差やカーブが多く、交差点での徐行運転の連続などで患者を安静に搬送するには、患者の負担もさることながら、救急隊の負担も非常に大きかったと思われる。

交流人口増が課題

両自動車道の開通後は、救命救急センターや



専門的な治療のできる病院までは一般道を走行していたときの半分の時間の約三十分で搬送できるようになり、患者の早期治療が可能になった。カーブの多い峠越えなどの必要がなくなり、患者に対して揺れの少ない安定走行ができ、車内での応急処置もしやすくなった。

もう一つ大きな効果は、湯浅広川消防組合は二台の救急車を配備しているが、以前は一回の搬送時間が往復で二時間～三時間かかっていたので、救急要請が重なったときには、救急車が出はらって十分な救急活動ができなかったこともあった。しかし現在では、相当な時間短縮ができ、次の患者への対応も整っている。

自動車道が開通して道路も整備され、交通面では非常に改善された。今後どのようにして交流人口を増やすかということが町の大きな課題である。

実際には、自動車道が南進されたことにより、本町が「通過点になっている」という問題もある。いかにして、自動車道を利用して来てくれる人が湯浅町に目を向けてくれるかということ、現在町民のみならずとも考えているところだ。

両自動車道は私たち町民にとって大きな財産であると考え、さらにこの自動車道を活かしたより一層、救急活動の充実を図るとともに、「活力ある美しい町・誇れる町ゆあさ」を目指したまちづくりを活用していきたいと考えている。

国道53号の魅力グレードアップで委員会 好評なふれあい街道スタンプラリー



津山市都市建設部次長
光井正起

一市六町、住民、国の出先が連携

岡山県南都市圏と鳥取都市圏を結ぶ国道53号。岡山では県内の中心部を南北に走っており、地域の経済活動になくてはならない重要な路線である。

このうち、国土交通省岡山国道工事事務所と



国道53号グレードアップ委員会

沿線地域一市六町（津山市・御津町・建部町・久米南町・中央町・勝北町・奈義町）は地域住民と協力しながら53号のグレードアップを図り、併せてこれら自治体が相互に交流、連携しながら地域の特性を活かした個性的なまちづくり、道路空間を創造することを目的として平成六年一月に「国道53号グレードアップ委員会」を設置した。

沿線には、八幡温泉、川柳の小径公園、誕生寺、総合運動公園、鶴山公園、現代美術館などがあり、そして県北部では国道がループ橋となっており、見所がたくさんある走っていて楽しいルートである。

同委員会では、これまでに「ロードフェスティバル in 津山」「日本列島横断リレーシンポジウム」などのイベントを実施したり、各種事業へ参画してきた。

中でも、毎年定期的に開催している「備前・美作53次ふれあい街道スタンプラリー」は好評でたくさん応募がある。

これは国道53号を東海道五十三次にあやかったもので、沿線一市六町の施設や名所旧跡の十カ所に応募ハガキ、パンフレット、スタンプ

を用意して五カ所以上押印したハガキを事務局へ郵送してもらうというもの。抽選での当選者には、各市町の特産品を五十七人に発送している。このスタンプラリーに参加することで、今まで何も気にしないで走っていた道だがいろいろな所に寄ることができ、沿線の珍しい所も見し、楽しいドライブができたとのコメントを書いた応募ハガキが多く寄せられた。

グレードアップ委員会の総会や抽選会、またイベント開催時には、背中にロゴを入れた黄色に黒い縁取りのハッピを着る。これは関係者がよく分かり同感覚が盛り上がるからだ。

地元ラジオ局で特番

平成十三年八月四日には、岡山の山陽放送ラジオで「国道53号ふれあい発見の旅」と題して午前六時三十分から十二時までの長時間の番組があり、当委員会が主催となって放送された。

この内容は、国道53号の中央部にある道の駅「くめなん」をキーステーションにしてアナウンサーの谷五郎さんと西田多江さんが二台の「ラジまる」カーに乗車。岡山市側の辛香峠からと県北の奈義町黒尾峠の両サイドから、各地

の「あなたのホットビューポイント」として国道からの景観の良いところの案内、川舟大工さんの苦労話やJ・A津山の高野百円市での新鮮な取りたて野菜の販売状況などをインタビュウを交えながら紹介した。

国道53号の工事を請け負っている会社も「ふれあっぷ53クラブ」と名付けた組織をつくり、交通量の大変多い現場での安全工事、落石に対する安全工事の内容、凍結防止剤散布や除雪作業のため傷みの早い橋梁部の補修工事の苦労話などについて現場から直接放送された。

道路に愛着と関心を

またこの日は、くめなん道の駅構内において八月「道路ふれあい月間」のイベントを開催し、津山バイパス橋名発表式を行った。

小中学生の応募がたくさんあり、地名からつけたものや、遊び心からつけたユニークなものまでいろいろとある中で、小学生からの採用作品一点と佳作二点について表彰状と記念品を贈った。

こうしたイベントを通じて子供たちも国道を身近に感じてくれ、物を捨てたり置いたりしない、きれいで通行しやすい道路となるように関心を持つてくれることを期待している。

駅舎内の情報コーナーには、「国道53号今昔写真展」や「はっとビューポイント写真展示」を実施した。

昭和三十年前後の写真と改良された現在の国

道の写真を見比べて、年配者たちは昔の国道に思いをはせて、話がはずんだ。

事務局として生放送に出演した幹事長の私もグレードアップ委員会の目的や活動について、インタビュウにこたえながら二十分間ぐらい内容を紹介した。

これからも、国道53号を身近に、愛着と関心をもって地域の道として利用していただくようお願いした。

求むボランティア

また、委員会から要望や提案をするなかで、津山駅前にある国道53号今津屋橋の歩道部分を



(上) 国道53号今津屋橋歩道拡張工事完成式

(下) 今津屋橋橋台絵図完成表彰式(作品と採用作品応募者)



二・五から五に拡張改良工事をしてもらい、十二年十月に完成した。J・R利用者の市街地への入り口となる所であり、きれいで安全な歩行ができるようになったと大変喜ばれている。この橋の橋台部分は吉井川の都市緑地として芝生を張り、整備した。朝夕の散策に利用する人びとが多い河岸で、橋台へのスプレーによる落書き対策に頭を痛めていた。そこで先に絵を描いておこうと計画し市民から図柄を募集、津山にゆかりのある優秀作品を選んで国道工事事務所で施工してもらい七年三月に完成した。それからは落書きがなくなった。

イベントやスタンブラーは地域や国道利用

者の皆さんに喜んでもらいながら進めているが、これからの課題としては植栽可能なスペースへ花の植え付けや、危険の少ない箇所での道路清掃などの作業に、ボランティア団体の人たちに数多く参加してもらい、管理者と一体となった美化清掃活動を展開していくことである。



満田 誉

佐賀県企画部長

原稿依頼がまいこんだ。

「また、情報基盤のPRですね」

課長が言った。

課員がみんな、うなずいた。

この冒頭の短い、あるいは七五調の四行を、田口トモロヲ氏に朗読していただくと、NHKの人気番組「プロジェクトX」の気分にあひたれる。画面に「ブロードバンドはいつ?」「社長の執念」「非情の絶壁」「町民の祈り」などというテロップを縦横に流すと、ほとんどオープニングは出来上がったも同然だ。そんな勝手なことを考えているが、小職の周囲にも、ささやかながら「プロジェクトX」の候補が、少なくとも一つある。「県内隅々までのブロードバンド化」が、それである。

在宅で、教育・経済活動・医療・福祉といった多様な活用を可能にし、また、電子政府・自治体に対応するためにも、インターネットのブロードバンド化は地域づくりの重要課題である。ただ、ここで問題に突き当たる。「民間にできることは民間にまかせる」との方針で情報基盤を整備すると、本県の場合、常に大都市よりも後回しにされ、人口密度が低い地域は、いつ整備されるかも定かでない。全国で見ても、町村は人口では二一%にすぎないが、面積では七二%も占めているのである。こうした町村の、しかも点在する各戸までどのように情報基盤を整備するかが一番頭の痛い問題である。

幸い、本県は、ケーブルテレビの普及率が高いという特長を有する。そこで、このケーブルテレビ網を情報基盤としても活用し、県内隅々までのブロードバン

Project X

それぞれのプロジェクトX

ド化を図ろうとしている。また、平成十四年度からは、市町村が、個々の世帯までのケーブルテレビ網（いわば「市町村道」）の整備

・県は、高速な幹線部分（いわば「県道」）の整備と役割分担し、整備のピッチを上げる。

県内の各市町村に目を向けると、世帯カバー率がほぼ一〇〇%という頭抜けた団体がある。県西部に位置する武雄市である。実際に整備を担ったのはケーブルテレビ会社の株ケーブルワン。「お人好しな会社ですから」社長の原隆司氏は、ここに至るまでの道のりについて、謙遜してそう言う。が、県内市町村中四番目に広い同市の約一万世帯が、山あいを含めてカバーされており、まさに地域づくりの使命感に燃えた「プロジェクトX」である。

今日、ユニバーサルサービスの価値が、若干軽んじられているような気がしてならないが、地域の一企業が、公益サービスたる情報通信分野でユニバーサルサービスを達成していることに、心から敬意を表したい。そう言っているうちに、聞こえてきた。

紛れ散らばる星の名は

忘れられても

ヘッドライト・テールライト

旅はまだ終わらない……

（中島みゆき「ヘッドライト・テールライト」）

エンディング曲の時間になったようだ。

というわけで、全国各地のNHKの皆さま！ローカル番組枠でも、それぞれのプロジェクトXの制作について、なにとぞよろしく。

大賞

美濃和紙あかりアート展(第八回)
岐阜県美濃市 主催団体 美濃和紙あかりアート展実行委員会
開催日 平成十三年十月六日、七日 開催場所 美濃市街地 観客動員数 約四万人



第6回 ふるさとイベント大賞

(財)地域活性化センターと全国58の新聞社共催による
「第6回ふるさとイベント大賞」が決まり、
創意と工夫に富む7つの地域イベントが表彰された。

優秀賞

松山・21世紀イベント「ことばのちから2001」

愛媛県松山市 主催団体Ⅱ松山市・松山21世紀委員会
開催日Ⅱ平成十三年八月十一日～十九日 開催場所Ⅱ大街道ほか 観客動員数Ⅱ十万人



優秀賞

いいた人形劇フェスタ(第三回)

長野県飯田市 主催団体Ⅱいいた人形劇フェスタ実行委員会
開催日Ⅱ平成十三年八月二日～五日 開催場所Ⅱ市内全域 観客動員数Ⅱ三万四千八百人



【文化・交流部門】

部門賞

がいせん桜祭り(第十八回)

岡山県新庄村 主催団体Ⅱがいせん桜祭り実行委員会

開催日Ⅱ平成十三年四月二十二日 開催場所Ⅱがいせん桜通り 観客動員数Ⅱ二万人



【祭り・スポーツ部門】

部門賞

国際溪流滝登りinななやま(第十四回)

佐賀県七山村 主催団体Ⅱ大雨風七山

開催日Ⅱ平成十三年八月十九日 開催場所Ⅱ鳴神の丘運動公園から観音の滝 観客動員数Ⅱ三千五百人



部門賞

〔産業・観光部門〕

しもかわアイスキャンドルフェスティバル(第二十七回)

北海道下川町 主催団体Ⅱしもかわアイスキャンドルフェスティバル実行委員会
開催日Ⅱ平成十三年二月十七日、十八日 開催場所Ⅱ下川町総合グラウンド 観客動員数Ⅱ四千六百八



特別賞

選考委員

21世紀未来博覧会(山口きらら博)

山口県 主催団体Ⅱ21世紀未来博覧会協会 開催場所Ⅱ阿知須町きらら浜
開催日Ⅱ平成十三年七月十四日、九月三十日 観客動員数Ⅱ二百五十一万四千七百七十八人





篠田 昭

新潟日報社論説委員

明かり取りの中心や吹き抜けなどに面白い工夫がある町屋だが、これまで武家屋敷の陰

まちに人を呼ぶ

町屋のお人形さま

全国の地方都市で中心市街地の空洞化が深刻になっている。地域で一番の商店街がシャッター通りに姿を変え、歩く人影もまばらだ。

そんな中で新潟県北部の村上市は、冬場の三月に人の動きが絶えなかった。土日には県外客も含めた人の波が押し寄せる。お目当ては「町屋のお人形さま」だ。

城下町の村上はこれまで武家屋敷の復活などに力を入れてきた。北限の茶所や三面川の鮭でも知られ、「観光文化都市」を標榜してもいる。しかし、人口三万人余のまちに人を呼び、歩いてもらうようにするのは難しい。

まちを自らの手で活性化しようと平成十年に結成された村上町屋商人会は、「地域にある財産に光を当てよう」と考え、戦災や火事などに遭わず、城下町・村上とともに歩んできた町人町の町屋の魅力に焦点を当てた。

に隠れていた。しかし、商人会は「この空間こそが村上の顔になり得る」と思い至った。

商人会の吉川真嗣会長らは「まちの中でふれ合うことこそ観光だ。町屋を活かした新しい形の観光が考えられるはずだ」と語り合った。

行き着いたのがそれぞれの町屋に江戸時代から伝えられ、秘蔵されている「ひな人形」だった。「各家に飾ったひな人形を旅人に見てもらおう」と吉川さんらは動き出した。一軒一軒を説得に回り、六十軒の賛同を得た。

こうして同十二年三月、「城下町村上・町屋の人形さま巡り」が始まった。

反響は驚くほど大きかった。ひな人形を切り口にしたイベントは各地にあるが、訪れた人を町屋に招き入れて、当主らがひな人形のいわれや町屋の特徴などを説明する「ふれ合い型」が訪れる人の心を打った。

口コミで良さが広まり、昨年は一カ月余で五万人、この春は七万人が村上を訪れた。市民主導のまちおこしに共感したJR東日本は二日間、SLを新潟市から走らせた。

七万人が訪れる経済的波及効果を地元は「三億円近い」と試算する。行政主導ではなく、住民自らが発案したイベントの効果は大きかった。人形巡りに協力する家にはそれぞれの苦労があるにせよ、イベントにかける公式費用は「まち歩きマップ」製作費の三十五万円だけというのも素晴らしい。

それ以上の効果が精神面に表れた。ひな人形や町屋の由来を説明するのは何と云ってもお年寄りの役割。お茶を出しながら昔話をしているうちに、お年寄りが元気になった。「私らのほうが楽しませてもらっています」と語るお年寄りの姿が今年も見られた。

人形さま巡りに続き、昨秋には「町屋の屏風まつり」も始まり好評だった。地域の景観を大切にしようという黒塀を復活させる取り組みも起きている。

「ないもののねだり」や「箱物依存」から脱却し、「地域にこそ宝物がある」という村上の取り組みに、まちづくりの原点を感じた。

観光戦略のキーワードは「四国遍路」 文化遺産を地域振興の原動力に

現存する歌集である『万葉集』は、千二百年余の昔であるが、その「みち」の表記には、「道」「路」のほかに「美知」の漢字があてられている。ひと・もの・情報の流れる「みち」を「美知」と書いて、「美しく知る」世界と表現した万葉人の感性は、グローバルで、その個性を賛美し、二十一世紀のわれわれにも通じる感覚であろう。

ところで、今日のモータリゼーション社会での道は、地域の動脈であり、その効用の見方によつては、地域発展の存亡にかかわること、必然的に政策的要望が配慮されることになる。現在、地域振興へとおびただしい道路網が整備されているが、道の空間という文化的意味合いが強調されるようになった。これは前記の万葉人がいう「美しく知る」感性と共通するところがある。新生さぬき市は安全で、人に優しく、そしてしなやかな親切が感じられる感動と交流の道を整備しようと標ぼうしている。

新市の誕生

さる四月一日に香川県大川郡の長尾・志度・津田・大川・寒川各町が合併し、さぬき市が誕

生した。市の面積百五十八平方キ、人口五万七千人で、市内の東西には高速と国道・県道合わせて六路線、南北に県道と市道の六路線の道路がある。ほぼ条里制に沿ったもので、歴史の誇るところである。現在、新しい市長のもとで、現状をふまえて地域振興策が練られている。

県内の観光業者によると、ここ数年、「いやしの心」を求めて四国遍路の数は年々増加し、大窪寺（旧長尾町）には年間約三十万人のお遍路さんが参拝。市は観光戦略のキーワードに「四国遍路」を掲げている。

人間生活には自然現象や運命がつきまとう。そこに不思議な偉大な力があり、これを恐れ敬



おへんろ交流サロン全景

う心が起きる。これが信仰となるのである。う。神秘な力を神と尊敬し、無病息災を願う気持ち。は当然で、信仰に帰依するのは自然である。このため寺院を建

て、仏を作り、先祖を礼拝する美風が育ち、こうした中で遍路が生まれ、四国という風土に育った信仰といえよう。

遍路の起源

遍路の確たる起源はつまびらかでないが、平安時代末期に作られた『今昔物語』や『梁塵秘抄』の中に出てくる。修行の僧が巡る四国の辺地は、海辺を回ること、その辺地は「辺土」と同義語と解され、辺地を巡る道が辺路（遍路）という言葉を作り出したと解されている。

ところで、弘法大師空海の霊跡を巡る四国の霊場がなせ八十八なのか、俗説的な見解は次のようである。①男の厄年四十二、女の厄年三十三、子供の厄年十三を合わせた②米の字を分解して八十八となり、五穀豊穡を願う③五十三仏と三十五仏を合わせた数字―など日本人の数量信仰によるところもいふ。

さぬき市には八十六番志度寺、八十七番長尾寺そして八十八番大窪寺の三札所がある。

遍路道と道標については、遍路道は四国の海辺を巡る環状線が基本線という。それは本尊中心に右回りに巡る法要の行道で、道程は千二百



おへんろ交流サロン代表
木村照一

キロという。徒歩では四十日前後を要する。その
 遍路道には、「道しるべ」という現代の交通標
 識的な道標があり、「丁石」とか「印石」とか
 いい、僧真念が貞享年間（一六八四～一六八八）に
 建立したのが始まりという。市内には道標が約
 四十基と丁石が七十基ほどある。

遍路に出る動機は人それぞれだろうが、その

へんろ資料展示室



へんろ資料展示室入り口

習俗には次のような慣行がある。①遍路の装束
 ②往来手形③札所の儀式④納経帳⑤接待⑥善根
 宿⑦遍路墓などで、その特色は接待であろう。
 これは遍路の長い道中を保障するようなもの
 で、その根底には弘法大師に対する信仰的基盤
 がある。

おへんろ交流サロン

市には接待に要する費用を出した接待田の石
 碑や文化十三年（一八一六）建立の「壺万五千
 人接待碑」などがあり、接待でもてなす風土の
 良さを証だてる歴史を刻んだ遺物が多く見られ
 る。

長尾地区では、四国霊場結願の地としての特
 色を出そうと平成元年から遍路資料の調査収集
 を行ってきた。幸いに地元から、納札など約二
 千枚の資料が得られたほか納経帳や道標、仏像
 までもが提供され、十一年十一月、前山地区活
 性化センター内に「へんろ資料展示室」が開設
 された。四国遍路の全容が簡明に理解でき、し
 かも文化的教養面へも配慮し、好評を得ている。
 また遍路の方が気軽に立ち寄り、気さくに話が
 できるよう交流サロンを設けた。今年三月二十
 四日には、「道の駅ながお」が完成し、相乗効
 果が期待される。

道の駅は、休憩・情報交流・地域連携の機能
 を持った地域と共につくる個性豊かなにぎわい
 の場である。また、遍路道は香川県東部から徳
 島県脇町へ抜ける住民の生活道路でもある。さ

さまざまな付加価値が付くことであろう。

道は動脈

この二月、旧長尾町が国土交通省から「へん
 ろ道・南海道」として「新四国のみち」整備事
 業箇所へ採択された。五、六年後を目標に、遍
 路に対応するための道路整備、休憩所や標識の
 設置、道路情報の提供などに取り組む。その際、
 さぬき市に残るお地藏さん、お堂などの文化遺
 産活用を目指す方針だ。

今後の展望と問題点を考えると、地域はその
 地域の自然、歴史、文化などを背景に成り立っ
 ているため、それぞれの顔を持っている。だか
 ら魅力があり個性がある。その中身は自然の美
 しさや、人びとが積んできた徳、歴史的文化遺
 産であろう。志度寺・長尾寺・大窪寺への南北
 にある遍路道と、大川町・寒川町から長尾を経
 る東西の南海道、そこにまつわる遍路資料や遺
 跡・遺物は、先覚者による徳であり、歴史的文
 化遺産という「宝」だ。

問題点といえば、産声をあげたさぬき市は、
 五つの核が同心円として、一つの顔づくりをす
 ることになる。かつては同じ郡という行政であ
 った。多少の反目もあるうし、時間もかかるう。
 さぬき市という歴史ゆかしい風土が誇る文化遺
 産が、魅力ある地域への原動力となることを期
 待している。道はまさに動脈といえる。

遍路道手作りペンチ足伸ばし
 笑みうかべ地藏の顔は道守る

生月大橋の開通で本土と陸続きに 鯨で栄えた離島に12倍もの観光客が



生月町企画財政課主事
坂本浩一

生月町待望の生月大橋（主要県道平戸生月線）が平成三年七月三十一日開通した。全長九百六十メートルで、三径連続トラス橋式としては世界最長だ。長崎県の北西部、平戸島のさらに西に位置する生月島は、わが国最西端に位置し、約八千人が住む一島一町の離島である。大橋の完成によつて本土と陸続きとなった。三百六十度を海に囲まれ、島の西側は玄界灘の荒波に削られ東海を望む断崖が続き、柱状節理や洞門など独特の景観を見せており、西海国立公園に指定されている。遠い昔、東シナの荒海を乗り切った遣唐使船の人びとが、本国の島影を間近にして「はつと息をついた」という由来で、生月と名付けられた。

日本一を誇った鯨組

生月町は捕鯨で栄え、現在に至るまで漁業中心で栄えてきた町だ。捕鯨は江戸時代初期、全国的に始まったが、生月を本拠地に集団で捕る鯨組（益富組）は日本最大の規模を誇ったという。しかし、近年の不漁により大型巻き網船の減船や漁師の後継者問題といった課題が増えている。また、同じく第一次産業である農業においても減反や後継者難といった問題を抱え町全

体の産業の冷え込みが懸念され、少子高齢化も急速に進み、町の活性化・産業振興対策が早急に必要なとなっている。

生月大橋が架かる前は、他の市町村に出掛けするにはフェリーによる交通手段しかなかった。比較的本数が多い航路だったが、最終便に間に合うようにしなければならなかったり、悪天候により足止めされるなどの不便が常につきまとった。橋の開通によつて島民の町外への行き来も楽になった。

大橋完成前の平成二年には約四万六千人だった観光客が完成直後の三年には約三十四万人、四年には五十四万六千人と十二倍にも急増した。平戸、松浦といった近隣市町村だけでなく、県外客が全体の三分の二を占める（県統計資料）。通行料が高いとの声も聞かれるが、大橋は生月町の活性化だけでなく県北地域の経済底上げにも貢献している。

また、橋が開通してより多く生まれたのは人との交流である。毎年、五月のゴールデンウィーク中と十月下旬ごろに「いきつき勇魚（いさ

な」鯨の古い呼び名）まつり」を行っている。特産品の販売やイベントで町民や観光客に生月のよさを実感してもらっている。自然を感じ、自然の物を食す。郷土の温かさを感じるのとはこ



生月大橋

ういったときではないだろうか。

ロード大会

次に、大橋開通と同時に「いきつきロード大



(上) いきつきロード大会。ファミリーの部のスタート
(下) 生月町博物館・島の館。勇魚(鯨)とりのジオラマ



会」を始めた。毎年二月の第二日曜日、招待選手と共に千人以上の選手が海岸線を走る。十キロの部では生月大橋を渡って戻ってくるというかなりハードなコースだが、大橋を走るときの爽快感を味わった人は次も来たいという思いになるそう。また、この大会では婦人会のぜんざいのサービスが定番になっている。レースに参加した人が走り終えた後に、おしゃべりをしながらぜんざいに舌鼓をうつ。婦人会にはボランティアで参加してもらい、材料は正月の残りの餅や家庭に余分にある砂糖などを皆で持ちよって作る。

そのほかにも農協や漁協に協力をいただき、町外からの参加者にはかんころ餅やスルメの一夜干しなどを参加賞に加え、漁協からはその日

に定置網から水揚げされた魚やイカを無料で配布するなど、生月ならではののもてなしを行っている。

催しを行う際、それまでは交通や宿泊施設の問題があったが、現在ではこうしたことに気を使わず行うことができるようになった。

歴史を活かした「島の館」

平成七年に開館した生月町博物館・島の館は四つのゾーンから成り、生月に伝わる歴史と信仰を見ることが出来る。捕鯨に関する大型ジオラマやミンク鯨とツチ鯨の骨格標本、勇魚捕りの物語や、四百五十年間、厳しい弾圧に耐え抜き受け継がれた信仰の奇跡「カクレキリシタン」や島に関する展示が満載だ。観光客の多くが立ち寄り現在までで約二十三万人の入館者を数えている。歴史を最大限に活かし伝える博物館は今後も生月の観光施設の拠点として重要な役割を担っていくと思う。

公園の整備は、自然をキーワードに行っている。風の迂るぐる公園にある生月町風力発電所(風車)はクリーンエネルギーとして注目を集め、観光の新

名所に加わった。直径四十二メートルのプロペラが頭上で回るさまにはだれもが圧倒させられる。ここでは生月大橋や館浦地区が一望でき、風を感じながら海や空や緑を見渡すパノラマに過ぎ行くときを忘れて、息つくひとときを与える。

また、四月には牧場(まき)の公園が開園した。芝生広場や木製の遊具、湧水路、月のモニユメントなどを整備しながら、昔からの石垣なども残し、町民や観光客が食事をしたり、ゆっくりと休めるようにした。夏、ここから見る水平線に沈む夕日に赤く染められた島影は、訪れる人びとを感動させる。

今後のあり方を模索

このようにそれぞれの特性を活かした催しや施設、環境づくりを行っているが、まだまだ満足のいくものではない。それは、相乗効果が生まれていないのではないかとということである。行政が民間企業や各団体と手と手を取り合ってネットワークを組み、必要な情報を伝え、人と人、物と物の交流から新しいものが生まれる。そんな相互協力によってさらに先を目指した観光客のニーズにこたえられる物を作っていくべきではないかということである。橋が開通して十年、いままでも振り返りこれからのあり方を考えるとどこに立たされている。観光客の多様化するニーズにどれだけこたえることができるかを模索しながら、これからの地域づくりを行っていきたいと考えている。

（財）地域活性化センターは、四月十五日、東京都千代田区のイイノホールで、全国五十八新聞社と共催、総務省および地方六団体の後援を得て、「21世紀のふるさとづくり2002」地域づくりはひとづくり」を開催した。

第一部は「第6回ふるさとイベント大賞」の表彰式、第二部は講演、シンポジウムなどで自治体関係者ら約七百人が参加した。

第

一部に先立つ来賓挨拶で、片山虎之助総務大臣が、小泉内閣が掲げる構造改革のうちの一つである地方分権について「現在進行している市町村合併は自主的に行われるのが望ましい。また制度面の改革と同時にソフト面での地方の活性化に期待し文化の伝承、地場産業の振興にも熱心に取り組んでほしい」と述べるとともに、「近き者喜び、遠きもの来る、というのがふるさとの理想像だ」と語った。

続いて、今回で六回目を迎える「ふるさとイベント大賞」の表彰式が行われた。同大賞は、創意と工夫に富み、地域の活性化に大きく貢献したイベントのうち、とくに優れたものを表彰し、全国に紹介することによって、個性豊かな地域社会の実現を目的に実施している。

今回も全国各地からユニークで発

想に富んだ百五十四のイベントが応募。今回、選考委員長に就任した石井幹子氏をはじめ七人で構成する選考委員会で厳正に審査した。結果、大賞一点、優秀賞二点、部門賞三点、選考委員特別賞一点の計七点（前年度九イベント）のイベントが選ばれた。

第6回 ふるさとイベント大賞

受賞7イベントを表彰 全国58新聞社との共催で 「21世紀のふるさとづくり2002 地域づくりはひとづくり」 を開催



片山総務大臣から大賞を受ける
石川道政美濃市長



三村毎日新聞社広告局長から優秀賞を受ける
高松和子いいだ人形劇フェスタ実行委員長



松本地域活性化センター理事長から部門賞を受ける
小倉博俊新庄村長



石井選考委員長から選考委員特別賞を受ける
二井関成山口県知事

大賞は岐阜県美濃市

大賞を受賞したのは、「美濃和紙あかりアート展」（岐阜県美濃市）。これは美濃和紙を使ったあかりのアート作品（立体造形）を全国から募集し、美しさを競い合うイベントである。作品は美濃市の中心市街地の重要伝統的建造物群保存地区に展示

され、訪れる観光客の評判で来場者数もかなり増加した。伝統のある和紙を使って古い歴史のあるまち並みを照らすという絶妙の組み合わせと展示説明や運営にボランティアが参加していることが評価された。

受賞挨拶で、美濃市長の石川道政氏は、「このイベント運営にはボランティアがなくてはならない。エン

トリイ数も回を重ねるごとに数倍に増え、近年は海外からも参加し、もちもにぎやかになって効果が表れている」と述べた。

優秀賞には松山、飯田両市

優秀賞は松山・21世紀イベント「ことばのちから2001」(松山市)と「いいだ人形フェスタ」(長野県飯田市)。松山市は夏目漱石の坊ちゃんの舞台で、正岡子規のふるさとでもあり数々の文人を輩出した同市では「ことばのちから」を新たなまちづくりのキーワードとし、二十一世紀に残したい言葉をカルタや大風にし商店街に掲示している。また高校生が俳句の出来栄をチーム形式で競う俳句甲子園や紙芝居、腹話術、バナナの叩き売りといった言葉のパフォーマンスでまちづくりに取り組んでいる。活字離れや会話が少なくなつたといわれる現在、言葉の楽し

さ、重要性を再認識させる活動を行っている。

優秀賞のもう一点「いいだ人形劇フェスタ」は市内百の会場で四日間にあわって、百五十を超える人形劇団が二百七十の演目を上演している。そのほとんどは地域の集会所などで行われ、市民と人形劇団の交流が図られている。運営には老若男女二千人を超える人びとがボランティアとして携わり、わが国最大級の人形劇祭典として知られている。このような市民主体の取り組みが地域の魅力を発信している。

今回三部門となつた各部門賞のうち、「文化・交流部門」は桜並木に仮装行列、踊りが繰り出し地元の名産品展などを出展し、村民だけではなく村外の人も大勢来て祝う「がいせん桜祭り」(岡山県新庄村)、「祭り・スポーツ部門」ではチームで滝や溪流を泳いだりして競い合う「国

ふるさとイベント大賞選考委員

●選考委員長
石井幹子(いしい もとこ)

照明デザイナー

●選考委員

岡崎昌之(おかざき まさゆき)
法政大学教授

宮本倫明(みやもと みちあき)
イベントプロデューサー

マリ・クリスティーヌ
異文化コミュニケーション

新原芳明(しんはら よしあけ)
総務省大臣官房審議官

嶋津昭(しまづ あきら)
全国知事会事務総長

三村泰史(みむら やすふみ)
毎日新聞社広告局長

吉田弘正(よしだ ひろまさ)
財団法人地域活性化センター前理事長

際溪流滝登りinななやま」(佐賀県七山村)、「産業・観光部門」は氷のランブシエードとろうそくを使ったアイスキヤンドルでまちを飾る「しもかわアイスキヤンドルフェスティバル」(北海道下川町)がそれぞれ

受賞した。

選考委員特別賞には、県民が自主的・主体的に取り組んだ「21世紀博覧会(山口きらら博)」(山口県)が選ばれた。

選考委員長である石井幹子氏が総評の中で「現在社会の閉塞状況において全国各地には趣向を凝らしたさまざまなイベントが行われていることに感心した。日本全国、元気がないと言われているがまだまだ元気な人びとがたくさんいることを感じた」と述べた。引き続き、受賞した各イベントについて「美濃和紙アート展」はまち並みを使って美しいイベントが行われたというアイデアと、まち全体に波及して通常のまちまでよくしてしまうということに選考委員全体が感動した。「松山市のことばのちから2001」は無形の言葉の力の凄さに驚いた。「いいだ人形劇フェスタ」は多くの回を

第6回受賞イベント

大賞

総務大臣表彰

優秀賞

財地域活性化センター会長表彰

優秀賞

主催新聞社代表(毎日新聞社)表彰

部門賞

財地域活性化センター理事長表彰

部門賞

財地域活性化センター理事長表彰

部門賞

財地域活性化センター理事長表彰

選考委員特別賞

選考委員会委員長表彰

美濃和紙あかりアート展(第8回)

美濃和紙あかりアート展実行委員会(岐阜県美濃市)

松山・21世紀イベント「ことばのちから2001」

松山市・松山21世紀委員会(愛媛県松山市)

いいだ人形劇フェスタ(第3回)

いいだ人形劇フェスタ実行委員会(長野県飯田市)

がいせん桜祭り(第18回)

がいせん桜祭り実行委員会(岡山県新庄村)

国際溪流滝登りinななやま(第14回)

大雨風七山(佐賀県七山村)

しもかわアイスキヤンドルフェスティバル(第27回)

しもかわアイスキヤンドルフェスティバル実行委員会(北海道下川町)

21世紀未来博覧会(山口きらら博)

21世紀未来博覧会協会(山口県)

重ねてきた努力と楽しそうに参加していることに感動した。」「新庄村の「がいせん桜祭り」は手作り祭りをやっていること」、「七山村の滝登り」は溪流を登っていくという新しいスポーツの形態が新鮮に感じられた」、「下川のアイスキャンドルフェスタ」は最初は小さなまつりだったが二十八回となりきれいな美しいお祭りになった。」「山口きらら博」は県民総ぐるみで取り組み入場者数が大変多く、中身も充実していた」などとそれぞれ感想を述べた。

さらに「今回選にもれた作品の中にもユニークで発想力豊かなものがたくさんあり、これらを活力ある地域づくりにつなげてほしい。受賞作品もさらに世界に誇れる大きなフェスティバルにしてほしい」と今後の活動への期待感を披瀝した。

元氣村からのメッセージ

第二部のシンポジウムでは、はじめに、株式会社ドリムインキュベーター社長の堀紘一氏が「ひとつくりのコツ」をテーマに基調講演。

この中で同氏は、民間企業数社に勤めた体験談をふんだんに取り入れながら、「人生、ビジネスの本質は、自分の頭で考えること、すなわち自分の問題を自分で設定し、自分で答

えを見つけないことだ」と述べさらに「ビジネスで成功するためには知識、やる気、センス、経験、技が必要だ」と指導者、リーダーはこの五つを身に付けさせるための場を若者に提供することの重要性を強調した。

この後「元氣村からのメッセージ」として、秋田県鷹巣町のM's設計室を主宰する松橋雅子氏が「ひと任せにしないまちづくり」秋田県鷹巣町「福祉のまちづくり」のとりくみ」と題し具体的事例を発表した。

松橋氏は、福祉のまちづくりに取り組んでいるメンバーの一人で、これまでの活動の由来、経過、現状について述べた。この中で松橋氏は「十年ほど前に『安心して暮らせるまちづくり』を掲げた町長に代わったことでそれまで依存型だった住民の福祉意識が徐々に変わり始めた。まず住民主体のワーキンググループを結成しすぐにできることを見つけ出した。そしてお年寄りが望んでいるサービスを提供するようになった。最初は少人数で始めた活動が、町全体に少しずつ知られてくるうちに、施設の使用や、資材の提供、またグループの人びとのもつ技能も生かされるという、思いも寄らない協力もあった。デイサービス、在宅介護センター、訪問リハビリ、ホーム

ふるさとイベント大賞



ヘルプサービス、介護保険などを住民主体で常に話し合いニーズに合ったものが提供されるようになった。町全体にこれらの取り組みが広まるにつれ、大人だけでなく子供の間でも関心が高まり、世代交流という相乗効果が生まれた。そうして町民全体が協力して住みやすいまちにしていこうといういい流れに結びついていく。これらの取り組みを十年間もパネルディスカッション
右から増田寛也、高木美保、高塚猛、大森彌、野中ともよの各氏

続けたら、住民が行政にしてもらうのではなく、自分で提案してやってみようという意識に変わった。他の町もまずはやるということから始めてください」とスライドを示しながら語った。

誇りを持てるまちづくり

最後に、「地域づくりはひとつくりに」と題してパネルディスカッションが行われた。パネリストは、千葉大学法経学部教授大森彌氏、ダイエーホークス球団社長高塚猛氏、女優の高木美保氏、岩手県知事の増田寛也氏の四氏でコーディネーターにジャーナリストの野中ともよ氏を迎えて、活発な議論がなされた。

「都市と農山村の共生というか、ともに生き合うという関係をもう一度国民的合意につくり変えるべきだ」(大森氏)、「自分たちが住みいいまちづくりというのは、市民自らがつくらなくてはならない」(高塚氏)、「住民主体のまちづくり、住民の価値観の変革、発想の多様性が必要だ」(高木氏)、「地方分権には地方の自助努力も大切」「日本を多様性を重んじる社会に」(増田氏)といった考えが示された。

(助)地域活性化センター業務第一課
副参事 穴吹勇人

地方公務員行政における新たな動きについて

地方公務員行政における最近の新たな動きとして、再任用制度、公益法人等派遣法、任期付研究員法などの概要と課題などについて紹介したい。

1 再任用制度について

平成十一年の地方公務員法の改正により再任用制度が導入された。この制度は、本格的な高齢社会の到来に対応して、高齢者の知識・経験を社会において活用していくとともに、年金制度の改正に合わせ、六十歳前半の生活を雇用と年金の連携により支えるため、定年退職者などのうち、六十歳前半に公務内で働く意欲のある者を、フルタイムまたは短時間勤務の職員として再任用することができるといものである。

当制度は、関係の規定が十三年四月一日に施行された。同日現在で総務省公務員部高齢対策室が把握した関係条例の制定状況を見ると、都道府県および政令市に関しては、それぞれ四十五、十一と、ほとんどの団体において制定済みである。未制定の団体もすべて十三年度中に議会に提案する予定としていた。一方、一般市と町村については、市で三百八十三が制定済みで

二百七十が未提案、町村については千七百八十三が制定済みで七百三十六が未提案と、制定されていないところが少なくない。

また、十三年七月上旬に同室が行った抽出調査によれば、すでに再任用職員を採用しているところは都道府県で三団体とごくわずかで、ほとんどの団体は十四年度からの採用を予定している。その理由としては年金の満額支給開始年齢が実際に引き上げられるのが十三年度末の定年退職者からであることが大きい。

さて、再任用制度を実施しようとする場合、現下の厳しい雇用情勢の下では、公務員優遇との批判を受けるなど地域の理解を得ることが難しい場合もあるかと思われるが、今後、団塊の世代が大量に定年退職する時代を迎えることも踏まえ、条例未制定の団体をはじめとして、制度の導入を積極的に進めていくことが重要である。

また、この制度は、働く意欲と能力のある高齢者を、本格的な職務に従事させるため採用するというものであることから、各任命権者においては、職務の再編などによりポストの確保に努めるとともに、採用、昇進、退職管理を含めた中長期的な人事管理に計画的に取り組んでい

く必要もある。

そのほかにも、選考基準のあり方、短時間勤務職員の勤務時間や定数管理、給与の格付けなど、各地方公共団体が対処していかなければならない課題は多い。総務省としても、同様の制度を有している国や他の地方公共団体における実施状況を含め、適時適切に情報提供や助言に努めることにしている。

2 公益法人等派遣法について

公益法人等派遣法は、従来任命権者が休職、職務専念義務の免除などの制度の運用などにより行っていた公益法人などへの職員の派遣について、統一的なルールを設定し、職員の派遣の適正化、手続きの透明化、派遣職員の身分取り扱いの明確化を図るとともに、地域における人材の有効活用を通じた行政と民間の適切な連携協力による地方公共団体の諸施策の推進を図ることを目的として十二年に制定された。

同法により、地方公共団体から公益法人などに職員を派遣する方法として、二つの制度が設けられた。

その一つ目が、「職員派遣」で、任命権者は、

課長級以上

単位：人、%

	総数	うち女性の数	女性の割合	総数の増減数	女性の増減数
昭和63年	98,739	1,766	1.8	—	—
平成元年	101,010	1,906	1.9	2,271	140
2年	104,145	2,165	2.1	3,135	259
3年	106,530	2,415	2.3	2,385	250
4年	111,542	2,932	2.6	5,012	517
5年	115,627	3,251	2.8	4,085	319
6年	118,420	3,582	3.0	2,793	331
7年	119,467	3,858	3.2	1,047	276
8年	122,976	4,135	3.4	3,509	277
9年	124,376	4,448	3.6	1,400	313
10年	124,578	4,573	3.7	202	125
11年	124,700	4,690	3.8	122	117
12年	124,596	4,298	3.4	▲104	▲392
13年	124,946	4,541	3.6	350	243

係長級以上

単位：人、%

	総数	うち女性の数	女性の割合	総数の増減数	女性の増減数
昭和63年	400,450	45,583	11.4	—	—
平成元年	412,359	49,026	11.9	11,909	3,443
2年	425,905	52,782	12.4	13,546	3,756
3年	442,060	59,257	13.4	16,155	6,475
4年	460,851	65,882	14.3	18,791	6,625
5年	478,999	71,825	15.0	18,148	5,943
6年	494,078	77,068	15.6	15,079	5,243
7年	503,267	81,089	16.1	9,189	4,021
8年	516,757	86,230	16.7	13,490	5,141
9年	526,711	91,018	17.3	9,954	4,788
10年	533,668	94,918	17.8	6,957	3,900
11年	540,080	98,567	18.3	6,412	3,649
12年	512,813	72,424	14.1	▲27,267	▲26,143
13年	514,886	74,382	14.4	2,073	1,958

職員全体

単位：人、%

	総数	うち女性の数	女性の割合	総数の増減数	女性の増減数
昭和63年	1,052,719	318,926	30.3	—	—
平成元年	1,058,571	321,134	30.3	5,852	2,208
2年	1,069,761	324,662	30.3	11,190	3,528
3年	1,082,477	329,421	30.4	12,716	4,759
4年	1,097,216	336,984	30.7	14,739	7,563
5年	1,113,122	344,194	30.9	15,906	7,210
6年	1,124,661	350,393	31.2	11,539	6,199
7年	1,127,466	353,414	31.3	2,805	3,021
8年	1,130,520	354,367	31.3	3,054	953
9年	1,130,570	357,229	31.6	50	2,862
10年	1,127,694	357,711	31.7	▲2,876	482
11年	1,125,576	357,592	31.8	▲2,118	▲119
12年	991,676	239,798	24.2	▲133,900	▲117,794
13年	983,849	237,084	24.1	▲7,827	▲2,714

注① 職員の範囲は「一般行政職」に限るものである。

② 「課長級以上」は部長級、部次長級および課長級の合計、「係長級以上」は課長級以上、課長補佐級および係長級の合計、「職員全体」は係長級以上と吏員の合計である。

③ 数値は、地方公共団体定員管理調査による。

④ 平成12年において大幅に人数が減少しているのは、同年に福祉職俸給表が創設されたことに伴い、同俸給表が適用されるべき職員が一般行政職から区分されたことによるものである。

その業務が地方公共団体の事務または事業と密接な関連を有し、地方公共団体が人的援助を行う必要性があると条例で定める公益法人などに對して、職員を地方公務員としての身分を保有したまま派遣することができるといものである。

職員派遣に当たっては、派遣先団体との間で業務内容、報酬その他の勤務条件、派遣期間

（三年以内。五年まで延長可能）などについて取り決めを締結し、その旨を派遣職員に明示したうえで、同意を得なければならない。地方公共団体は、派遣職員に対して給与を支給しないこととされているが、その業務が地方公共団体の委託業務である場合など、一定の場合には、条例で定めるところにより、給与を支給することができる。

二つ目が「退職派遣」。任命権者は、職員が、任命権者の要請に応じて退職し、地方公共団体が出資している株式会社などで、その業務が地方公共団体の事務または事業と密接な関連を有し、人的援助が必要であるものとして条例で定めるものの業務に専ら従事したときは、その期間の満了後、当該職員を採用することとされている。退職派遣に当たっては、職員派遣と同様

に、当該派遣先団体と業務内容、勤務条件、派遣期間（三年以内）などについての取り決めを締結することとなっている。

同法は、十四年四月一日（退職派遣に係る規定は同年三月三十一日）から施行されており、現在は、同法に基づいて、適切な派遣が行われているものと考えられる。

3 任期付研究員法について

十二年四月に地方公務員に関する任期付研究員法が成立し、同年七月に施行された。同法は、地域における柔軟で競争的な研究開発環境の実現を図るため、公設試験研究機関で専門的な知識経験などを有する人材を積極的に受け入れ、研究者の相互の交流を推進することにより当該公設試験研究機関の研究活動の活性化を図ることを目的としている。

同法による任期付研究員制度は、農業試験場、工業技術センターといった各地方公共団体の公設試験研究機関において、研究業務に従事する一般職の職員を、任期を定めて採用できるとともに、勤務時間について裁量勤務制によることができるというものであり、「招へい研究員型」と「若手研究員型」の二つの類型がある。

「招へい研究員型」は、研究業績などによりとくに優れた研究者と認められている者を、高度の専門的知識経験を必要とする研究業務に従事させるため採用するものであり、任期は五年以

内（とくに必要がある場合には七年以内。プロジェクト研究といった特別の計画に基づき期間を定めて実施される業務の場合には十年以内）である。

また、この招へい型研究員がとくに顕著な業績を挙げた場合には任期付研究員業績手当を支給することができるよう措置されている。さらに、その職務の性質上、時間配分の決定などを大幅に職員の裁量に委ねることが研究業務の能率的な遂行のために必要な場合には、当該研究員を、勤務時間の割り振りを行わないでその職務に従事させること（裁量勤務制）もできる。

「若手研究員型」は、独立して研究する能力があり、研究者として高い資質を有する者を、先導的役割を担う研究者となるために必要な能力のかん養に資する研究業務に従事させるため採用するものであり、任期は三年以内（とくに必要がある場合には五年以内）である。招へい型と同様、任期付研究員業績手当の支給が可能である。

任期付研究員制度については、国家公務員を対象とした法律が九年に施行されており、約二百人の採用実績があるが、地方公務員の制度については制度が施行されて間もない段階であり、採用実績が全国で十数人ととどまるなど、本格的な実施はこれからである。科学技術基本計画などをみても、産官学間の人材交流の促進がますます求められていることもあり、各地方

公共団体においてこの制度を積極的に活用されることを期待したい。

4 女性地方公務員の登用の拡大について

近年、男女を問わず個人がその能力と個性を十分に発揮できる男女共同参画社会の実現が重要な課題となっている。男女共同参画社会法においては、地方公共団体についても国の施策に準じ、男女共同参画社会の形成の促進に関する施策を策定・実施する責務があることや、都道府県男女共同参画計画の策定義務、市町村男女共同参画計画の策定の努力義務が規定されている。

十二年十二月に閣議決定された国の男女共同参画基本計画においても、女性地方公務員の採用・登用などに関する要請、地方公共団体への情報提供などが掲げられている。

国においては、十三年五月に人事院から「女性国家公務員の採用・登用の拡大に関する指針」が示され、これに基づき各省庁は十四年初頭までに、それぞれの「女性職員の採用・登用拡大計画」を策定している。

地方公共団体においても、地方公務員総数に占める女性公務員の割合が年々上昇するなど、女性の採用、登用などの努力が継続してなされてきているが、今後も、国の取り組みも参考にしつつ、女性地方公務員の職域の拡大、能力開発などを一層進め、公務における男女共同参画を実現することが求められる。

1 米国に学ぶ 「歩いて暮らせる 街づくり」政策

(財)地域活性化センター前コンサルタント業務課
副参事 木村恭一

地域コミュニティの喪失や中心市街地の空洞化、環境などの諸問題を解決するために提唱された「歩いて暮らせる街づくり」は、これからの地域づくりのキーワードとなるべき試みである。本調査は、米国においてコンパクトでサステイナブル（将来見込まれる経済的可能性を損なわずに現在の便益を享受する）な地域社会を目指す基礎的自治体の事例を調査することにより、「歩いて暮らせる街づくり」に取り組む日本の地域社会や地域コミュニティの再生に資することを目的とした。

● サクラメント市

サクラメント市は、一九九二年以来、それまでの郊外型開発をやめて、オフィス、商店、公共施設などがコンパクトな町中に混在する職住近在



によるまちづくり＝Mixed-useの政策を進めている。市街地におけるテナントと住居が一体化した宅地開発や公共交通機関の利用促進により、活気ある市街地を取り戻すとともに、エネルギー資源の節減と公害の抑制などの効果を得ている。

● デービス市

デービス市では、環境にやさしく安全で快適な地域社会を構築するために自転車利用を促進している。自転車専用道路は四十七キロ、自動車専用レーンは五十九キロにも達する。

平成13年度 環太平洋地域等 における地域づくり 調査研究報告書(上)

(財)地域活性化センターでは、平成13年度の環太平洋地域などにおける地域づくり調査研究として、2月28日から3月6日までの7日間、アメリカとカナダに2班に分けて現地調査を実施した。本号と次号でその概要を紹介する。

市では自転車利用計画も策定しており、自転車専用の信号や標識もある。この取り組みによって市内交通の四〇％を自転車が担っている。

このデービス市のなかに、サステイナブル・コミュニティで有名なビレッジホームズがある。この開発地区のモットーは「自然との共生」と「住民の連帯による強いコミュニティづくり」である。自給自足のための共同農地や自然排水システム、太陽熱を利用した快適な住居づくり、広いパブリックスペースや工夫を凝

らした住宅区画などのコミュニティを円滑にする取り組みが随所に見られる。

米国の事例から
学ぶこと

米国における住宅開発の中には、ミックスドユースや公共交通機関利用の促進、あるいは自然との共生を図り環境にやさしいまちづくり、さらには豊かな社会を構築するためにコミュニティの重要性に気づき、コミュニティを円滑にするための仕組みをまちづくりに取り入れている事例がある。

コンパクトなまちづくりは、中心市街地活性化、あるいは高齢者社会に向けた地域づくりのための一つの指針となる。また、今後市町村合併



研修風景

が進む中で、個々の地域のコミュニティをどのように構築していくかが地域づくりのポイントでもある。コミ

ビレッジホームズにおける
コミュニティを促進するための取り組み



〈オープンな宅地〉日常生活の中でコミュニケーションを促進するため、個々の住居のまわりにも可能な限りパブリックスペースを設けている

ユニティのあり方をもう一度念頭に置き、百年先、千年先を見越したまちづくりを目指したいものである。



〈広々としたオープンスペース〉さまざまな目的に利用できるオープンスペース。この設置もコミュニティを促進することに役立っている

2 フィルム コミッションに よるまちづくり

(勤地域活性化センター)前研修交流課
副参事 曾田智生

フィルムコミッションとは、映画、テレビ番組、CMなどの撮影が円滑に進むよう設けられた非営利の公的機関である。その活動範囲は、撮影に関する官公庁の許可可の仲介役、撮影現場での周辺住民の苦情対策、ロケ地に関する情報の収集、発信と

多岐にわたる。ロケ隊の滞在による経済的効果や映像に露出することによる知名度の向上を目的に近年、日本でもその設立が相次いでいる。今回の調査では、映像産業が急成長を遂げているカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州政府の外郭機関である British Columbia Film Commission (BCFC) を訪問し、その実態について調査した。

ノース ハリウッド

ブリティッシュ・コロンビア州では、対ドル為替の関係で人件費が安価であること、都市部から雄大な自然まで風景にさまざまなバリエーションに富んでいること、また、アメリ

カ国内では映画の制作費削減、労使関係の悪化、映像制作にかかる規制強化を背景に一九七〇年代半ばからアメリカ資本による映画が続々と撮影されるようになった。農林業、鉱業の低迷に悩んでいた同州は映像産業を新たな基幹産業として位置付け、これを育成していくために一九七八年にBCFCを設立した。

現在、同組織はロケ地の情報を世界に発信したり、国内外から撮影を誘致するマーケティング課、十七万点にも達する「フォトライブラリー」と呼ばれる映像資料をもとにロケ地に関するさまざまな問い合わせを受けたり、ロケ地使用料や賃金交渉などの相談窓口となるロケサービスク、撮影が実施される際の広報活動、撮影現場付近で発生する苦情の受付、仲裁を行うコミュニティ課の三つの課から構成されており、州職員が十五人従事している。BCFCの地道な活動により、一九九〇年から二〇〇〇年の十年間に、撮影された映画、テレビ番組の本数は五十本から百九十二本へ、また、地元に出下される制作費は一億八千万ドルから一億八千万ドルへと急増し、現在では『North Hollywood』と呼ばれるまでに映像産業が集積するようになった。

国、自治体 あけて支援

またカナダ政府では、ある一定の条件を満たせば映像制作にかかる人件費を最大で二一%を制作者に交付する制度や中小制作会社には低利の「フィルムローン」と呼ばれる融資制度を設けており、市町村でも独自に支援策を打ち出している。このように国、州、市町村一体となって映像産業を育成しているが、BCFCはこのほかに、地元の映像制作に対する協力的な雰囲気盛り上げていくことが重要だと強調する。

地元に対する経済的なメリットだけでは、円滑な撮影は困難であり、ブリティッシュ・コロンビア州内には、自らロケ地の提供を申し出たり、交通整理などを手助けするボランティアが多数存在するという。映像を制作する際には、交通渋滞、騒音、立ち入り禁止区域の設定など住民にさまざまな迷惑を掛けることが多い。日本で設立されたフィルムコミッションが成功して

いくカギは、この住民をいかに巻き込み、機運を盛り上げていくにかにかかっているのではないだろうか。



デジタル化が進むフォトライブラリー

北海道の空の玄関、新千歳空港から東へ三十分ほど列車に揺られると、追分町に到着する。明治時代の国鉄室蘭線・夕張線の開通以来、鉄道基地として発展してきた町であり、札幌や苫小牧港にもアクセスが良い。

しかし、人口は昭和三十五年をピークに徐々に流出し、さらには国鉄の分割・民営化が拍車を掛けた。「若い人が多く出て行ったので、さびしくなった」と語るのは工藤隆男さん。平成元年に設立された「追分町マチおこし研究所（以下「マチ研」）」の代表者である。本職はJRの運転士という工藤さんが、設立から現在までの経緯を語ってくれた。

新しいことへの挑戦 人口の流出で



工藤隆男代表

「人口流出で町がさびれてしまう危機感があったし、当時は道内でもまちおこし団体の設立が相次いでいた」。しかし、設立にはかわったものの、工藤さん自身が代表者である所長に就任したのは平成九年。全国的にまちおこし運動が下火になり

始めていた時期でもあった。「今までの事業を漫然と続けていてはいけない。何か新しいことに挑戦しなければ、活動が続かない」そうした意気込みでの所長就任であった。

マチ研の主な事業は、地元の清流安平川^{あひら}の浄化など、地域の自然への理解と共生にかかわるものが多い。しかし、果たして、自然環境保護がマチおこしにつながるのか。その疑問をぶつけてみた。

「一過性のイベントよりも、地道な活動を長く続けるのが大事。町民が理解し、支援してくれるのは身近な安平川への取り組み。川の浄化を活動の中心に据えたほうが長続きするのではと思った」と言う。地域に根をおろした活動にしたかった。町にとって安平川は普遍的なテーマなのである。

フォーラムの開催 高まった川への意識

もともと、マチ研の活動以前は、

一過性でない持続的な 活動の展開を 安平川を普遍的なテーマに

北海道追分町……………追分町マチおこし研究所 地域づくり団体探訪

Series

町の憲章で「清流安平川」とうたわれている川は、上流部の森林伐採と農地化、砂利採取などによる水量の減少で汚れがひどく、清流どころではなかった。川を浄化し、地域の誇りを取り戻したいという思いもあった。

そこで平成五年から「安平川フォーラム」を開催することになった。なぜ、川が汚れるのか。それを子供たちに考えてもらうのが目的だ。フォーラムの内容は毎年少しずつ変えてはいるが、子供たちに川の源流部がどれほどきれいなのかを見せることははずせないという。そのほかにも、魚釣りや水生昆虫の採集、カメラ体験など、すべて安平川への理解にかかわる活動で一日が終わる。



八年からは、クリーン安平川の日として、安平川にたまるゴミの除去活動も始めた。ただ、除去するだけでなく、中州にエゾミソハギという水に強い花を植えることも兼ねた活動である。空き缶、自転車、流木。初めての年は、四トトラック一台分のゴミが出たが、現在では、ゴミ袋が数袋で足りるという。

毎年、百五十人ほどの町民が参加する行事となったため、川への意識が高まり、ゴミは捨てられなくなったのである。



また、生活廃水が流れ出る出水口には、炭を詰め込んでの水質浄化作戦もとられた。炭も購入すると高価なので、自分らで炭窯を作り焼いた。炭の効果はてきめんで、設置後一週間で川の酸素が増え、今まで見られなかった水生生物も現れたという。

しかし、炭焼きの効果はここまででは止まらなかった。炭は年に五回ほど作るが、その過程には地元の子供たち、そしてお年寄りにも参加してもらおう。「炭を焼くときには、お年寄りが先生になり、子供たちを指導してもらおう。子供たちは好奇心の塊で、何でも教えてもらいたがるし、お年寄りは自分の経験と技術を教え

たがっている」。ただ、だれに何を教えてもらえるのか。だれに何を教えられるのか。お互いがそれを知らないで、マチ研がその橋渡しをしているのである。

子供たちには木を切るところから体験させる。最低限の準備と指導はするが、基本的に子供たちの好奇心に任せているという。「どこを切ったら、どう倒れるのか。木がどんなに重いものなのか。焼くとうなるのか。そのすべてを自分たちでやらないと面白くないし、覚えにくいから」。炭焼き体験の人氣は上乘で、道端で会えば「おじさん、次はいつ焼くの」と声を掛けられるという。工藤さんの顔がほころぶ。

また、工藤さんが所長に就任して以来、力を入れてきたのが、女性会員の増加である。マチ研の活動に女性の視点は欠かせないとの判断から、女性会員の数を倍増させた。その女性会員の一人が、炭で脱臭ボックスを作ろうと提案し、自ら見本まで作ってきたという。

単に箱に炭を詰めただけでなく、箱を色鮮やかに彩飾したもの、フラワーバスケツト型のものなど、見た目にも美しい脱臭ボックスが製作



追分町マチおこし研究所 ●プロフィール

●設立年＝平成元年2月 ●設立主体＝町主導 ●運営主体＝自主的組織

●代表者＝工藤隆男 ●会員数＝87人

●事務局連絡先＝〒059-1911 北海道勇払郡追分町本町6丁目54番地 追分町役場内 ☎01452-5-2411

された。このマチ研お手製脱臭ボックスは、町のあらゆる公共施設に設置されている。

地域通貨導入へ 会員50人で

そして今、マチ研が最も力を入れているのが、地域通貨「ぶらっと」の導入で十四年夏ごろからスタートの予定だ。取材したときは準備も大詰めに入っている時期だった。「地場のモノ、サービスが地場で流通していない。地場のモノ、サービスを何とか活用できないか」というのが導入の目的だった。

家庭には使って欲しいモノがたくさんあるし、他人に何かしてあげたい気持ちを持っている人もたくさんいる。しかし、何をしてよいか分からない。そこで、マチ研が地域通貨導入の準備機関としての活動も始めたのである。地域通貨は会員制。四十代から六十代が中心の約五十人で開始する。

「ぶらっと」での支払いで受けたいというサービスは、これまで無料だったものが多い。「雪かきなどは、これまで近所のご好意でやってくれたが、タダほど高いものはない。長い付き合いをするなら、はじめをつけたほうがよいと思う。病院への送迎でも、買い物代行でも、多少なり

とも『ぶらっと』で支払ってもらえれば、遠慮せずに頼める」

家で使わない不要品のフリーマーケットも予定しているという。「ぶらっと」で買い取りを行い、月一回のフリーマーケットで「ぶらっと」で販売する。不要品の再利用に「ぶらっと」を仲介させるのである。また、商店街の協力も取り付けており、地域通貨で飲食できる喫茶店も登場するという。

マチ研の活動に次々と新機軸を打ち出す工藤さん。忙しくて大変ではないですがとたずねると、「自分が楽しいから活動を続けられる。炭焼きや水遊びにしても、本当に面白いと思う。自分が楽しくなければそれを他人に押し付けても、喜ばれないし、広がっていくかない」と語る。

無理じいはしない。これ面白いからやってみな、というような雰囲気でも、マチ研の活動は継続されている。だからこそ人が集まってくるのだと思う。

マチ研では、当初の一年間は試行期間とし、来年から本格的な運用を目指す方針だ。追分町で「ぶらっと」が行き交っていることを願ってやまない。

(財)地域活性化センター前コンサルタント業務課
副参事 日下 智

住みやすいまちを自分たちで考えよう オンラインワンを目指して

知多半島の西海岸に南北に細長く位置する愛知県常滑市。古くから陶芸のまちとしても知られている。この常滑市の北の玄関口である大野町は、鎌倉時代から知多半島の政治・経済・文化の中心地として栄えた歴史あるまちである。伊勢湾とみだかな丘陵地を望むまち中には矢田川が流れ、古寺や格子のある家が軒を連ねるまち並みが残っている。この大野町で「住みやすいまちを自分たちで考えていこう」と活動に取り組んでいる「大野コミュニティ」を訪ねた。

手作りの憩いの場 わくわく広場

名古屋から名鉄常滑線で四十分。大野町駅に降り立つと、迎えに来てくれた大野コミュニティの皆さんが駅前の広場に案内してくれた。「わくわく広場」と名づけられたそのスペースは、空き地だった駅前市有地を大野コミュニティのメンバーが手作りで設けた憩いの場である。木々や草花が植えられ、古い木製の電柱を切ったすや常滑焼のブロックを利用したテーブルが置かれている。

天気が良かったこともあり、この広場に腰をおろして話をうかがっていると、大野コミュニティのメンバーなど知り合いが声を掛けながら行き来していく。会長の井上恭子さんは「駅前というまちの顔ががらんとした空き地では寂しい。自分たちのできる範囲で手作りでも広場を作りたいかった」と話す。手作りとはいえず、メダカが泳ぐ池もある立派な広場となっている。

大野コミュニティは昭和六十三年三月に市の主導により設立された。しかし、活動に際して市の関与は今はほとんどなくなり、いわゆる自治会の代表などが集められた発起人は現在の会長である井上さんら二、三人だけとなってしまった。そのため井上さんたちの知り合いなどに声を掛けて十人程度でのスタートだった。現在では会員は六十一人、自営業や会社員などさまざまな人が参加している。市からはまちづくりに関する助成を受けてはいるものの、現在も活動に関する関与はない。「(も

愛知県常滑市.....大野コミュニティ 地域づくり団体探訪 Series

大野コミュニティの皆さん



花壇整備から 取り組み

の(ごとを)実行するのに時間はかかりますが、自分たちの活動である、という自負が持てます(井上さん)。

取り組みは大野町駅前の花壇整備に始まり、矢田川沿いのフラワーベルト、わくわく広場の整備などの活動。大野町内を散策し魅力を発見するタウンウォッチングは、「尾張大野歴史散策ラリー」というイベント開催につながっている。このイベントでは、現在では使用されていない昔の銭湯を利用しての写真展など、空き店舗を利用したアートギャラリーもにぎわいづくりに加わっている。また、毎年夏に矢田川で開催される「大野龍神祭」では単なるイベントへの協力だけではなく、川の環境を考える機会につながるような清掃活動やしじみの放流にも取り組んでいる。

平成十四年二月二日午後二時、矢田川にかかる大野



わくわく広場のいすづくり作業



矢田川沿いフラワーベルトの整備

橋が開通した。この橋の欄干デザインは町の住民ワークショップにより企画され、そしてデザイン案となった欄干にはめ込む陶板もまた、住民により下絵づくりが行われた。大野コミュニティはこの事業の世話役となつて活動した。ワークショップでは住民の公募を行い、陶板作製や開通式のイベントでは町内の他団体との協議のうえ、住民の意見が反映された橋の誕生となった。大野コミュニティの「自分たちのまちのことは自分たちで考える」という活動が町内に少しずつ浸透しつつあるよう

だ。今後は橋周辺には空き地もできないため、この活用についても考えていきたいという。

“一人ひとりが主役”をモットーに

大野コミュニティでは「一人ひとりが主役」であり、会員が意見・アイデアを自由に発言、提案できることをモットーにしている。お話をうかがったメンバーからも「昔からの祭りなどではしきたりが多く、自分の意見やアイデアは通りにくい。大野コミュニティではそうしたアイデアが実現できる場」と語ってくれた。

大野コミュニティ●プロフィール

●設立年＝昭和63年3月 ●設立・運営主体＝自主的組織 ●代表者＝井上恭子 ●会員数＝61人（男37人、女24人）

●事務局連絡先＝井上恭子 ☎479-0866 愛知県常滑市大野町8-125

☎0569-43-1153 e-mail:inoue@chitanet.or.jp

総会資料を見せてもらおうと「企画書」というページが並んでいる。「毎年、会員には一人一つ以上の事業企画案を出してもらっています。すべてを採用できませんが、普段の活動になかなか参加できなくても、こうした形だけでも活動に参加してもらえれば」と井上さんは話す。グループの活動は毎年の継続性が必要

な一方、時代の流れに対応できる柔軟性も重要であり、毎年、活動を見直す大野コミュニティの体制はそうした柔軟性を備えている。また、日々の活動になかなか参加できなくとも、こうした書面での提案といった方法をとることでメンバー一人ひとりの参加意識の持続にもつながっているのではないだろうか。

まちを住みやすくしていこうという大野コミュニティの活動も当初は地元になかなか受け入れられないことが多かったという。町代制という昔からのコミュニティがある中で、しきたりに縛られない緩やかなコミュニティ活動は十五年の間に少しずつ受け入れられ、理解が深まるようになったのはこの五年くらいのこと。名古屋市の出身である井上さんは「大野町は海、山、川がある自然に恵まれた場所。地元にいると分からない良さ、ほかから来て分かる良

さがある」。

副読本に載った会の活動

井上さんは、「個人的な思いも強いですが」と前置きしたうえで、大野コミュニティの活動の支えである大野町を自分たちで守り築き上げようという思いを子供たちにどう伝えていくかを考え実行していきたいという。大野コミュニティの活動が小学校社会科の副読本に取り上げられていることもあり、地元の小学生たちが社会科見学に訪れることが多いそう。地域のことを考え活動する場が子供たちの社会勉強の場になれば、より将来に目を向けたまちづくりとなっていくだろう。

「将来にわたりここに住むだろう子供たちに、まちづくりの思いを伝えていきたい。日本のどこにでもあるようなまちを目指すまちづくりではなく、ナンバーワンではなくオンリーワンのまちづくりを目指したい」と井上さんは語ってくれた。取材中、「わくわく広場」をたまたま訪れた小学生に話しかけるメンバーを見ながら、子供たちとともにまちをつくる大野町の姿が見られるのは、そう遠くないのではないかと感じた。

（財）地域活性化センター 情報サービス課 副参事 五味ひとみ

全国初の「伝統産業の日」を制定 ——京都市 地場工芸品の需要喚起と 振興を目指す

京都市には、西陣織、京友禪、京

焼・清水焼をはじめとする多くの伝統産業が営まれており、本市の基幹産業でもあるこれらの振興は本市経済の活性化に欠かすことのできない極めて重要な課題となっている。

しかし、生活様式の変化や景気の低迷、さらには経済環境のグローバル化が進展する中、多数の海外産製品が流入するなどの影響から、伝統工芸品の需要は大きく落ち込み、現在、大変厳しい状況におかれている。

こうした中、本市は、全国初の「伝統産業の日」を制定し、十五年度からこの日を中心に、改めて伝統工芸品のすばらしさを広く国内外に発信し、大きく需要を喚起する取り組みを実施、一層の伝統産業の振興

を図る方針だ。

きものを着れば きもの着れば きもの着れば きもの着れば

平成十三年七月、「伝統産業の日」

制定に関する諮問委員会として業界関係者、学識経験者、市民代表者などで組織する「伝統産業の日」制定委員会が発足。同委員会は市民へのアンケート調査を実施するとともに、数回の審議を重ね、「伝統産業の日」の時期や関連事業内容についての提言を取りまとめた。

本市では、これらの提言を受け、

①国民の祝日である「春分の日」を「伝統産業の日」とし、②「伝統産業の日」の時期に次のような関連事業に取り組むこととした。

・オープニング事業「きもの着用者のみを対象にした芸術鑑賞イベントの実施」

・伝統工芸品を一堂に集めた販売・展示会

・各種シンポジウム・セミナー事業
・西陣織・京友禪などの産地との連携事業

・きもの着用者を対象とした市バスなどの公共交通機関の優遇措置

・京都市指定伝統工芸品制度の創設
市内在住の少人数の後継職人によって受け継がれている貴重な伝統工芸品を対象に、本市独自の指定伝統工芸品制度を創設

制定記念 フォーラムを開催

平成十四年三月二十一日の「春分の日」には、来年度からの本格的な事業実施を前に、プレイベントとし

て「伝統産業の日」制定記念フォーラムを下京区の池坊短大で開き、今後の伝統産業のあり方を考えるシンポジウムを開催した。

第一部の基調講演では、マーケティングコンサルタントの西川りゅうじん氏が「伝承・伝統、不易流行のマーケティング戦略」と題して講演、「自然界で周囲の変化に適應できる生物が生き残るように、伝統産業も時代に合わせていく努力が必要である」と提言した。

また、第二部のパネルディスカッションでは、西川氏を交えて、漆工芸家の中村宗哲氏、西陣織工業組合副理事長の松山靖史氏ら業界代表者をはじめ、コンサルタント、行政関係者など五人のパネリストが伝統と暮らすあたらしさをテーマに討論。

「伝統産業の強さ・弱さ」などを指摘し、今後のあり方について熱心に意見交換を行った。

本市では関係業界との連携、市民とのパートナーシップのもと、「伝統産業の日」関連事業の推進を通じて、京都から全国に向け、伝統工芸品が暮らしに根付いた「二十一世紀における日本の生活文化のあるべき姿」を提案・発信していきたいと考えている。



室 吉峯
京都市商工部伝統産業課長



シンポジウムの基調講演

地域だより

町が地域商品券を発行 北海道留辺蘂町

留辺蘂町は、町内だけで使える地域商品券を四月から発行している。隣接する北見市で買い物をする町民がかなりいることから、「地元の購買力を高め、町の活性化を図りたい」（林政商工課）。道内で町が独自に地域商品券を発行するのは珍しい。

商品券は千円と五百円券の二種類。発行は今年度と来年度の二年間だが、有効期限は十七年三月末まで。商工会と役場支所で買い求める。登録したホテル、飲食店などのほか診療所での医療費支払いもOKだ。「年間で千三百五十万円ほど見込んでいたが、四月一カ月だけで約二百万円の売り上げがあり、出足は上々」（同）としている。

地域づくり補助金を創設 岩手県北上市

北上市は「わがまちづくり支援事業補助金交付制度」を今年度創設した。地域住民が主体的に取り組むまちづくり事業に対し、市がその一部を補助するもので、限度額は百万円。対象は市内に十六ある自治会。当初予算に八百万円を計上。三年を限度とする。

中3まで医療費無料 栃木県芳賀町

芳賀町は四月から、これまで「未就学児」までを対象にしていた医療費無料制度の支給年齢を「義務教育終了時」まで引き上げた。

通院、入院を問わず、患者が支払った医療費の領収書など所定の書類を役場に申請。町では支払額を患者指定の金融機関に振り込む。

保健福祉課によると、児童生徒の健全育成と少子化対策が狙いで、対象となる小中学生は約二千四百人。今年度予算に四千万円を計上した。

庁舎の電力を風力発電に 埼玉県越谷市

越谷市は、地球温暖化の原

因となる二酸化炭素（CO₂）の排出削減のため、使用電力を風力発電に切り替える「グリーン電力制度」を十月から導入する。自治体では全国初。電力会社などが設立した日本自然エネルギーを通し、風力発電会社のウインドテック南十和田に業務委託費を支払う。市が使用する電力の六割弱に相当する。

バス待ち郵便局 四国郵政局

四国郵政局は四月から、バス利用者が停留所の最寄りの郵便局で待ち時間を過ごせるようにと「バスストップ郵便局まごころサービス」を始めた。管内四県の六十八局が対象で、全国初の試み。

「地域のお客さまの利便性向上と施設の有効活用で触れ合いの場にしたい」（坂本・施設情報部管理課長）とのこと。実施局はいずれもバス停留所から十以内。「バスまち郵便局」のステッカーが張られ、「郵便局の中に入ってお待ちください」と表示している。局内にはいすを置いている。「田舎の局では、待ち時

副町長制を導入 新潟県与板町

与板町はこの春から「副町長制」を導入した。昨春秋、初当選した山崎忠弥町長の発案。収入役の代わりに助役二人制にし、呼称を「副町長」にした。

べつ甲工芸館がオープン 長崎市

長崎市の「べつ甲工芸館」が、松が枝町の旧長崎税関下り松派出所跡（国重要文化財）にオープンした。三百年以上前、中国から長崎に伝えられたべつ甲工芸は、南海のサンゴ礁で生まれ育ったタイマイで作られ希少価値が高い。市内にある社団法人日本ベ

つ甲協会の「べつ甲文化資料館」が昨年末閉鎖したのに伴い、同協会から譲り受けた帆船の置物、香入れ、五重の塔、硯屏などのべつ甲製品、関係資料約四百点を展示している。



うみがめ課を新設 福岡県津屋崎町

絶滅危う種のウミガメの産卵地を抱える津屋崎町はその保護などを担当する「うみがめ課」を設けた。

ごみ処理担当の環境整備課を組織替えし、課長以下四人。ウミガメの上陸が確認されたのは昨年是一回のみ。六月から施行される保護条例はウミガメ捕獲・卵採取の禁止や生態系に支障をきたす行為の自粛などを規定している。

センター 通信

◆「わくわくWORK 六月号」を発行

(財)地域活性化センターでは、地方公共団体や第三セクターなどが、地域を支え、地域の活力を生み出す人材を広く募集する際に役立つ「地域人材確保システム」を運営しています。

このシステムは、登録していただいた情報を募集情報誌『わくわくWORK』やインターネット、メールマガジンを通じて全国に向けて代行発信するものです(費用は無料)。

『わくわくWORK』には、地方公共団体の職員、第三セクターの支配人、農業者、実習生などの募集情報が掲載されています。今年度は、年四回(六・七・八・九月号)発行する予定です。全国のハローワークで入手できます。

また、インターネット、メールマガジンについては、毎月情報を更新しております。

笑顔がいちばん! 放送予定

●6月2日
福島県郡山市、昭和村
夢交流とからむしの里

●6月9日
北海道室蘭市、厚沢部町
海獣達の楽園 廃校文化交流

●6月16日
長崎県島原地域
体験! 世界初火山ミュージアム

●6月23日
愛媛県南宇和郡
海の楽園新発見!

●6月30日
新潟県岩船広域市町村圏、山北町
春の都岐沙羅つきさくらを行く

TBS系、毎週日曜日
午前7時~午前7時30分
※一部で放送日時が異なる地域があります

●首長来訪

▼岐阜県高山市 土野守市長
(4月9日)

▼山口県 二井関成知事(4月15日)

▼北海道ニセコ町 逢坂誠二町長(4月16日)

▼長野県木曽福島町 田中勝巳町長(4月24日)

地域おこし出前研修会

(財)地域活性化センターでは、毎年東京を中心に実施している「地域イベント実務研修会」および「地域産品・観光おこし研修会」のカリキュラム一式をパック化した出前研修会を実施します。

〈設定コース〉

イベントコース、地域産品・観光おこしコース

〈委託料〉

会場借り上げ料などおよび研修会運営にかかる費用、研修生募集のための通信運搬費など並びに地域の視察調査にかかる旅費交通費などは、主催者側の負担となります。

また、講師謝金の半額は当センターが負担しますが、講師派遣のための旅費の全額および講師謝金の半額については、主催者側の負担となります。

※コース内容、日程(2泊3日以内)などにつきましては、ご相談のうえ決定させていただきます。

〈平成13年度実施実績〉

①イベントコース

福岡県八女市 7月4日(水)~6日(金)

②地域産品・観光おこしコース

岡山県 8月6日(月)~7日(火) / 岩手県東和町 3月3日(日) / 新潟県小出町 3月18日(月)

〈平成13年度受講者からの声〉

○多面的な考え方を学び、これから業務を進めていくうえで参考になった。(福岡県八女市)

○産品の製品化はまだこれからの段階だが、製品化へのステップ、地域性、人材の必要性が大変勉強になった。(岡山県)

○地元のことはある程度知っていると思っていたが、まだまだ眠っている観光資源があることが分かった。(岩手県東和町)

○グループワーク形式は意見が出やすくして良い。(新潟県小出町)

〈お問い合わせ先〉

(財)地域活性化センター 業務第1課 宮本・高柳 / 業務第2課 森下
電話 03-5202-6136・6137 FAX 03-5202-0755
e-mail morishita-s@chiiki-dukuri-hyakka.or.jp

海外視察調査団

平成14年度団員募集開始

(財)地域活性化センターは毎年、地域づくりに関する調査を目的とした海外視察調査団を派遣しており、参加者から好評をいただいております。平成14年度も次のコースを企画いたしましたので、ぜひご参加ください。

●視察テーマ

地方行政の構造改革・環境型社会・自主的な産業振興・IT施策

現在、日本では、地方自治体などが進める地域づくりにおきまして、構造改革やIT施策の推進などいろいろな課題を抱えております。今後も社会環境の変化などにより、さまざまな問題への取り組みが求められます。この企画は、21世紀を迎え、これから重要と考えられる地方行政の構造改革、環境型社会、自主的な産業振興、IT施策の4つのテーマについて、ヨーロッパの先進地を視察し、地域づくりの取り組みを調査するものです。

訪問国=イギリス、ドイツ、イタリア、フランス

訪問地=ロンドン、ミュンヘン、ミラノ、パリなど

日程=平成14年10月7日(月)から10月18日(金)まで

費用=660,000円

募集人員=25人程度

お申し込み=平成14年7月31日(水)まで

〈お問い合わせ先〉

(財)地域活性化センター 業務第2課
電話03-5202-6137

OITA BEST *Selection*



こころに響く感動、365日。

大分県・(社)大分県観光協会



ラベンダーパーク

森林文化につつまれた 人間都市の実現にむけて…沼田

本市は、平成二年に、人と自然が真にふれあう理想のまちを目指し、「森林文化都市」宣言を行いました。その実現に向けた取り組みとして、シンボルマークおよびシンボルキャラクターの制定・普及、シンボル館の建設、木造による公共施設整備、森林に関する資料の整備、主要道路周辺の森林整備などを行ってききました。

そして、昨年十一月に新世紀記念事業「2001本桜の植樹」を開催し、市民と準市民（沼田市をふるさとと思ふ人ならだれでもなれる）により、未来の沼田を桜（市の木）の里として後世に残そうと、道路沿線などに桜の植樹をしました。また、

2001本桜の植樹



シンボル館「森林（もり）の館」

本市の最北部、標高千三百メートルには小尾瀬と呼ばれる「玉原高原」があり、自然を活かした整備が進められています。ここは、ミスバシヨウ・ワタスゲなどの湿原植物が咲き乱れる自然の宝庫で、周囲四・五キロの美しい玉原湖もあります。そして、冬はスキー、夏は関東最大の二十万平方メートルに五万株のラベンダーが咲き誇り、サイクリング・テニス・キャンプなどが体感でき、四季を通じて自然とふれあうことができます。

ものよりも心の豊かさの時代、あらゆる生命の基盤である豊かな森林に囲まれたまちを誇りとし、森林文化都市にふさわしいまちづくりを進めています。



4月実施イベント

★ふるさと情報プラザイベントスペース

4月2日～5日
山梨県
信玄公祭りと桃源郷やまなし①

4月22日～26日
宮崎県
宮崎の観光と物産展②

6月のイベント予定

★日本橋プラザビルイベントスペース

6月21日
近畿6府県首都圏観光連絡協議会（大阪府、兵庫県、京都府、滋賀県、奈良県、和歌山県）

6月25日～26日
香川県

6月28日
木曽福島町（長野県）

★ふるさと情報プラザイベントスペース

6月3日～7日
中国五県物産観光協議会（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）

6月19日～21日
徳島県

6月24日～27日
花巻市（岩手県）



■編集後記

▼今回は道が広域行政圏の地域づくりにどのような役割を果たしてきたか、を特集テーマにした。

▼今ではわが国有数の群馬交響楽団。戦後の廃虚の中、「新しい文化国家を建設しよう」と創設された市民オーケストラが前身。車が走ると砂ぼこりとなる道をバスに揺られながら楽器を運び学校で演奏。移動音楽教室は毎年三百校に及び群馬県では小中学生が在学中に三回は聞くという。音楽は心を和ませ、情操教育にも役立つ。五十年を越える歴史を持つが、いつまでも続けてほしいものだ。

▼生月大橋の完成で本土と陸続きとなった長崎県生月町。四方を海に囲まれた離島で、一ヶ先の隣町に出掛けることもままならなかった。橋のお陰で観光客が急増、周辺自治体でも経済効果は大。こういう公共事業こそ地域振興のため最も望まれる施策では。

▼女性ならではの発想でまちづくりに取り組んでいるグループを「女性パワー」として紹介しているが、最近では男性群を交えて活動するようになってきている。時代の流れと推察する。今月から「地域づくり団体探訪」シリーズに含めていきたい。ユニークな事例は、回数は減るがこれまで同様、取り上げていく。（やなぎ）

●7月号予告

特集Ⅱ学校からのまちづくり

地域づくり6月号

平成14年6月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyokka.or.jp/> 印刷＝大日本印刷株式会社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

夢が好き。
笑顔が好き。
きょうも宝くじ。



この遊具「宝くじ遊園・くだものオーケストラ」
(静岡県浜松市フルーツパーク内)は、
宝くじの普及宣伝事業として設置されたものです。

宝くじ 宝くじは、夢と街づくりで
健やかな暮らしを
応援します。

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。
本誌は財日本宝くじ協会の助成を受けて刊行しています。

財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしつかり買ってしつかり楽しむ

宝くじのホームページ

<http://www.taho.or.jp/jp/lottery/>